

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第39号

平成17年度市内遺跡確認調査報告書

しきりょう みなみさこ だ しん ばん しょうしろ
敷領遺跡・南迫田遺跡・新番所後遺跡

平成18年3月

指宿市教育委員会

例 言

- 本書は、平成17年8月20日から平成18年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する数領遺跡・南迫田遺跡・新番所後遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、指宿市教育委員会が実施した。調査は渡部徹也が主に担当し、中摩浩太郎、鎌田洋昭の協力を得た。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	教 育 長	林 賢一郎
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 次 長	石口 一行 (平成17年12月31日まで)
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	教 育 部 長	大山 功 (平成18年1月1日より)
		社会教育課長	迫田 福幸 (平成17年12月31日まで)
		社会教育課長	岩崎 三千夫 (平成18年1月1日より)
		社会教育係長	川路 潔
		派遣社会教育主事	井上 智司
		社会教育係主事	岩松 友美
		社会教育係主事	嶺元 和仁 (平成17年12月31日まで)
		社会教育係主事	宮地 主悦 (平成18年1月1日より)
		文化係長	枝田 富雄 (平成17年12月31日まで)
		文化係長	西野 実 (平成18年1月1日より)
		文化財係長	下玉利 泉 (平成18年1月1日より)
		文化係主査	東中川睦子 (平成18年1月1日より社会 教育係主査)
		文化係主事	吹留 義輝
		文化係主査	中摩浩太郎 (平成18年1月1日より文化 財係主査)
発掘調査・報告書作成担当	同	上 渡部 徹也 (同 上)	
		文化係主事	鎌田 洋昭 (文化財係主事)

発掘調査・整理作業員 竹下カツエ、吉元澄子、新小田千恵子、浜田文男、權崎秀夫、上玉利孝志、高田正明、王子田トヨ子、小田口恵子、吉濱淳子、清 秀子、竹下珠代、松元かおり、松山麻弥

- 本書の編集、図面作成、写真撮影は、渡部徹也が主に担当し、中摩浩太郎、鎌田洋昭の協力を得た。
- 調査、及び報告書作成に要した経費2,642,000円のうち、50%は国、10%は県からの補助を得た。
- 本報告書のレベルは、全て絶対高である。図中に用いられている座標値は、国土地標系第Ⅱ系に準ずる。
- 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋幸礼川遺跡Ⅲ』(1992、指宿市教育委員会)と『水迫遺跡Ⅰ』(2000、指宿市教育委員会)に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。
土器の混和剤【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】
土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】
調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】
色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※地層・遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。
- 数領遺跡の自然科学分析については、株式会社古蹟境研究所(代表：杉山真二氏)に研究協力を頂いた。
- 数領遺跡の調査については、文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」『火山噴火罹災地における文化・自然環境復元』の一環で、お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする計画研究『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元—九州を中心に—』の調査研究プロジェクトと共同し、鹿児島大学新田栄治教授、東京工業大学亀井宏行教授、お茶の水女子大学、鹿児島大学、東京工業大学の学生諸氏の指導・協力を得て実施した。記して感謝申し上げたい。
- 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれで保管し、活用する。

本文目次

敦賀遺跡確認調査編

第1章 調査に至る経緯と調査概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査の履歴	1
第3節 調査の目	2
第2章 遺跡の層序	3
第3章 調査の成果	5
第1節 遺構について	5
第2節 遺物について	16
第5章 まとめ	25

参考資料編

第1章 調査に至る経緯と調査概要	28
第2章 調査地点の層位	29
第3章 調査の成果	30
第1節 遺構について	30
第2節 遺物について	31
第4章 まとめ	47

試掘調査編

第1章 南迫田遺跡について	52
第2章 新番所後遺跡について	54

挿図目次

第1図 調査地点図1	1	第14図 出土遺物実測図2	18
第2図 調査地点図2	2	第15図 出土遺物実測図3	19
第3図 層位模式図	3	第16図 出土遺物実測図4	20
第4図 874年の開間岳火山灰の降下範囲	3	第17図 出土遺物実測図5	21
第5図 調査区層位断面図	4	第18図 水田跡検出状況全体図	26-27
第6図 地中レーダ探査の範囲	5	第19図 調査地点図	28
第7図 タイムスライス図1	6	第20図 層位断面図	29
第8図 水田跡平面図	7	第21図 ビット平面図・断面図	30
第9図 水田跡上面コンタ図・畦等断面図	8	第22図 遺物分布図	31
第10図 タイムスライス図2	9	第23図 出土遺物実測図1	33
第11図 植物珪酸体分析結果	13	第24図 出土遺物実測図2	34
第12図 ビット検出状況図・遺物分布図	15	第25図 出土遺物実測図3	36
第13図 出土遺物実測図1	17	第26図 出土遺物実測図4	37

第27図	出土遺物実測図 5	38	第35図	出土遺物実測図	53
第28図	出土遺物実測図 6	39	第36図	調査地点位置図	54
第29図	出土遺物実測図 7	40	第37図	トレンチ配置図	54
第30図	出土遺物実測図 8	41	第38図	層位断面図	55
第31図	出土遺物実測図 9	42			
第32図	調査地点位置図	52			
第33図	トレンチ位置図	52			
第34図	1・2トレンチ層位断面図	53			

写真目次

写真1	敬領遺跡遺景	1	写真20	地層の状況	47
写真2	地中レーダ探査風景	5	写真21	遺物出土状況 1	47
写真3	調査区全形	6	写真22	遺物出土状況 2	47
写真4	畦の断面	9	写真23	ビット完掘状況	47
写真5	畦の形状 1	9	写真24	ビット 2 断面	47
写真6	畦の形状 2	9	写真25	出土遺物 1	48
写真7	畦の形状 3	9	写真26	出土遺物 2	49
写真8	水田跡検出状況 1	10	写真27	出土遺物 3	50
写真9	水田跡検出状況 2	10	写真28	出土遺物 4	51
写真10	水田跡検出状況 3	10	写真29	出土遺物	53
写真11	地層の状況 1	10	写真30	1トレンチ地層状況	53
写真12	地層の状況 2	10	写真31	2トレンチ地層状況	53
写真13	地層の状況 3	10	写真32	調査区全景	55
写真14	遺物出土状況	10	写真33	地層の状況	55
写真15	ビット検出状況	10			
写真16	検出された植物珪酸体 (参考)	14			
写真17	出土遺物	24			
写真18	調査区全景	28			
写真19	調査風景	47			

表目次

表1	植物珪酸体分析結果	18	表8	遺物観察表 4	46
表2	遺物観察表 1	22	表9	第93条届出・対応一覧	56
表3	遺物観察表 2	23	表10	報告書抄録	57
表4	ビット法量表	30			
表5	遺物観察表 1	43			
表6	遺物観察表 2	44			
表7	遺物観察表 3	45			

■ 敷領遺跡確認調査編 ■

第1章 経緯と調査概要

第1節 遺跡の位置と環境

敷領遺跡は、指宿市十町小字敷領、及びその周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

遺跡は、指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央、海拔4～6m前後の標高にあり、火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿橋半礼川遺跡の北北西約2kmの地点に位置する。敷領遺跡のある扇状地は、北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川の両小河川に挟まれ、海岸に向かって緩やかに傾斜している。調査地点から海岸までは、最短で約1.2km、西に約1kmで標高250m前後の山並みの裾部にいきあたる。現在、調査地点付近は住宅地の中に畑が点在する景観を呈するが、戦後まもなく間では水田地帯で、雨期には水田が水没するほど水捌けの悪いところであったという。

遺跡の発見は、明治34年に甕形土器が表採されたことによる⁽¹⁾。その後も、大正13年に弥生土器や成川式土器、打製石斧等が採集され、遺跡の存在が知られるようになった。現在のところ、周知の遺跡の範囲は第2図のとおりであるが、これは、指宿市誌に掲載されている敷領遺跡、中敷領遺跡、下敷領遺跡の3遺跡を包括する。各遺跡で採集された遺物の時期が共通することや地形の状況から一連の遺跡と推定されるため、市教育委員会では平成8年度より敷領遺跡として取り扱っている。

※(1)『指宿市誌』指宿市誌編纂室 1985

第2節 調査の履歴

敷領遺跡の本格的な発掘調査は、平成7年度に市教育委員会が実施した遺跡範囲確認調査に始まる。6つのトレンチを設定し、計149㎡について確認調査を実施したところ、指宿地方を広く覆っている874年3月25日の開閉岳噴出物、通称「紫コラ」で埋没した水田跡が検出された。平成8年度には、老朽化した市営・県営住宅の建替えに伴い1,132㎡について発掘調査が実施された。この調査で水田が面的に確認された他、奈良～平安時代の掘柱建物跡、総柱建物跡等の遺構や多量の須恵器・土師器、「福」、「智」と書かれた墨書土器など官衙的様相を帯びた遺物・遺構群が発見された。さらには、古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代のベッド状遺構を伴う竪穴式住居跡も検出され、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

翌平成9年度には、温泉タンクの設置



第1図 調査地点図1



写真1 敷領遺跡遠景

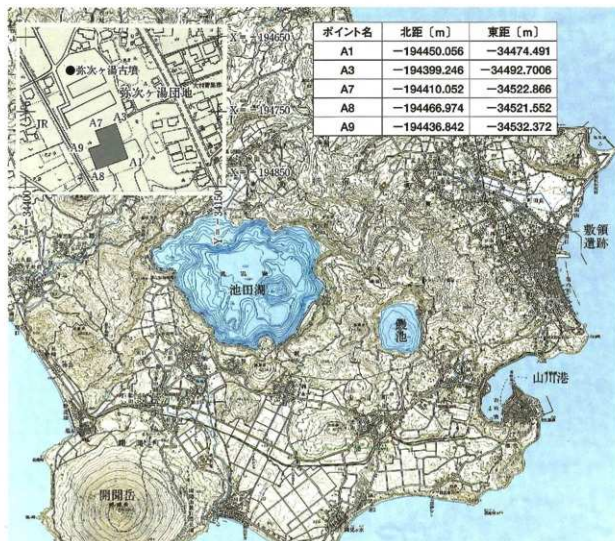
に伴い、50 mについて調査が実施され、水田の広がりや奈良～平安時代の柱穴群が確認された。

平成10年度には、2棟目の団地が建設されることとなり、825 mについて調査が実施された。この調査では、水田跡と奈良～平安時代の建物群の広がりが確認され、さらには、7世紀第4四半期の開闢岳火山灰（通称「青コラ」）で埋没した円墳が発見された。それまで、川内川以南の臨摩半島は、高塚古墳の空白地帯であったが、この調査により国内最南の古墳の存在が明らかとなった。円墳は「弥次ヶ湯古墳」と命名され、指宿市指定文化財として保存されている。

参考文献：「数領遺跡」1997、「数領遺跡Ⅱ 弥次ヶ湯古墳」1999、指宿市教育委員会

第3節 調査の目的

お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする平成16年度科学研究費補助金「特定領域研究」『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元—九州を中心に—』の研究プロジェクトに指宿地域が選定された。同研究は、火山災害遺跡の調査を通じて生活・文化環境の復元を試みることを目的の一つとしており、調査研究への協力依頼と対象となり得る遺跡の照会を受けた。本市においては、数領遺跡地内での弥次ヶ湯古墳発見以来、周辺に他の古墳があるのかどうかを確認することが重要な課題であったため、同遺跡を候補地と



第2図 調査地点図2 (S=1/100,000)

してあげ、共同で発掘調査を進めていくこととなった。調査については、まず、当該地の地中レーザ探査を先行して行い、その結果をもって、発掘調査を計画することとなった。
(文責 渡部)

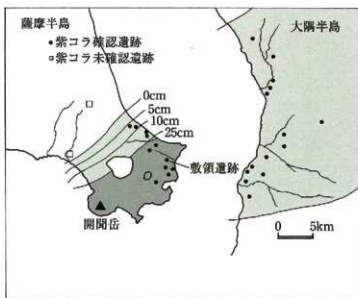
第2章 遺跡の層序

敷原遺跡の層序は、開聞岳火山灰が鍵層となっている。以下に今回の調査で確認した層について記述する。

第1層	黒褐色土層 (目視 10YR3/1 計測値 7.5YR3/1) 表土 現代の土層。
第2層	黒～黒褐色土層 (目視 2.5Y2/1 計測値 5YR3/1～2/1) 中世の時期に該当する。部分的に下部が灰色～褐色を帯びる。
第3層 a	暗紫灰色火山灰層 (目視 5P3/1 計測値 10YR3/1～N3/0) 西暦 874 年 3 月 25 日の開聞岳火山灰。細粒の火山灰と粗粒の火山灰が相互に堆積し 6 つのフォール・ユニットが観察される。極めて硬く固結している。植物遺体を含む。第3層は、その色調から「紫コラ」と呼称されている。
第3層 b	暗紫灰色シルト質火山灰層 (目視 5RP4/1 計測値 5RP4/1, 5YR3/1) 西暦 874 年 3 月 25 日の開聞岳火山灰。細粒の火山灰の堆積で、部分的ににぶい黄褐色を呈するところがある。植物遺体を含む。
第3層 c	火山礫層 874 年開聞岳噴火の最初の降下物。径 2～5mm 前後の火山礫が 2～3cm 程度堆積する。
第4層 a	褐色粘質土層 (目視 10YR4/4～4/6 計測値 10YR3/2) 水田跡上部の粘質土層。2～10cm 程度の堆積が見られる。
第4層 b	灰褐色粘質土層 (目視 2.5Y3/3) 水田跡下部の粘質土層。還元され灰色を帯びる。下層の影響を受け、湧水が見られる。
第5層	青灰色火山灰層 7 世紀第 4 四半期頃に比定される開聞岳火山灰。調査地点ではルーズな体積でブロック状に点在する。第5層はその色調から「青コラ」と呼称されている。
第6層	褐色土層 (目視 10YR3/3) 古墳時代の遺物包含層。調査地点では不透水層となっており、湧水が見られる。

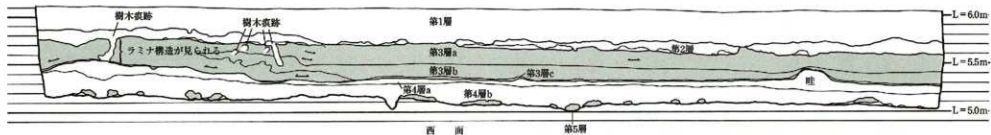
第3図 層位模式図

開聞岳は、縄文後期以来、6回の噴火が知られている。西暦874年の噴火は、「日本三代実録」に該当する記録があり橋半乳川遺跡で確認された災害の状況や遺物の年代観と一致することから、その火山灰が「紫コラ」と判明した。「紫コラ」は指宿地域を中心に大隅半島の南部にまで及んでいる。敷原遺跡は、25cm以上の火山灰の堆積が見られるエリアにある。これまでのところ、「紫コラ」が堆積している遺跡で災害復旧の痕跡が確認できた事例はまだない。(文責 渡部)



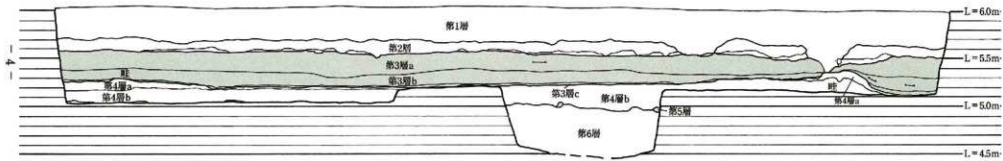
第4図 874年の開聞岳火山灰の降下範囲

※「指宿地域の火山災害遺跡」『火山災害と人類』時産館COCCOはし
むれフォーラム資料1997年より抜粋、一部改変

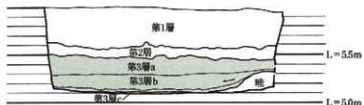


西 面

第5層



北 面



東 面

第5図 調査区層位断面図 (S=1/40)

第1節 遺構について

1. 地中レーダ探査について

高塚古墳の有無を確認するために、団地南側の指宿市土地開発公社が所有する土地を地中レーダで探査することとなった。探査は、研究プロジェクトの一員である東京工業大学大学院情報理工学専攻亀井宏行教授を中心に同研究室、鹿児島大学法文学部考古学研究室によって行われた。探査の概要は下記のとおりである。

■期 間 平成 17 年 3 月 14 日～22 日

■探査面積 約 2,300 m² ■測線間隔 0.5m

■測線方向 東西及び南北

■使用機器 G.S.S.I SIR-2 400MHz アンテナ

KODEN KSD-3AM 166MHz アンテナ

※探査領域は NIKON Trimble R7 で GPS 測量。

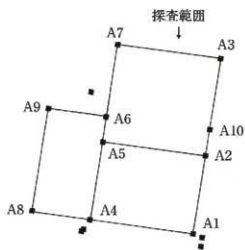
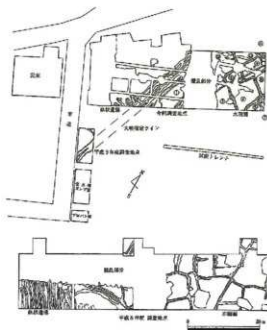
※探査は、計画研究：代表 亀井宏行「火山噴火被災地域の地力回復過程の時空間解析に関する研究」の一部として行われた。

2. 探査結果とトレンチの設定について

探査の結果、高塚古墳と推定されるマウンドを確認することはできなかった。これは、紫コラ層と水田層の境界面において、レーダ波の大部分が反射し、水田層より下位のデータが十分に得られなかった事による。従って、高塚古墳の存在する可能性を棄却するものではない。

第7図は、探査エリアのタイムスライス図である。平成7年度に検出された水田跡と水田を区画する畦がタイムスライスの結果と一致することから、期せずして探査エリアにおいて874年の開闢岳噴火で埋没した水田の様相が明らかになった。そこで、この結果を受け、大学側、市教委側でそれぞれトレンチを設け埋没水田の発掘調査を行うこととした。

なお、地中レーダ探査の詳細については、「鹿児島県指宿市敷額遺跡の地中レーダ探査」日本文化財探査学会第8回大会資料 2005、または、平成18年度刊行予定の科学研究費の報告書を参照されたい。



第6図 地中レーダ探査範囲



写真2 地中レーダ探査風景

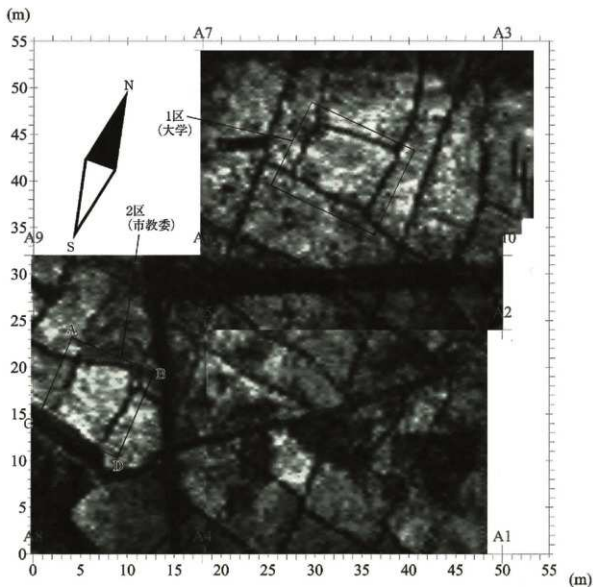
3. 874年3月25日に埋没した水田跡について

地中レーダ探査の結果を元に、水田1枚を発掘調査できるよう10×10mのトレンチを設定した(第7図参照)。表土から約30cm掘削したところで第4層(紫コラ)を検出、第4層bの中位まで重機による除去を行った。以後、手作業で火山灰・火山礫を除去し、水田跡を検出した(第8図、写真4～10参照)。

水田跡は、概ね東西、及び南北方向に伸びる畦と南側で確認された階段状の遺構で区画された台形を呈し、田面の面積は、約36.68㎡を測る。トレンチ南側に水口と水尻が確認された。水口部分については、表面に鉄分の沈着が見られ、表面が硬化していた。旧地形の緩傾斜の方向から、導水経路は、田面①→田面②→田



写真3 調査区全景



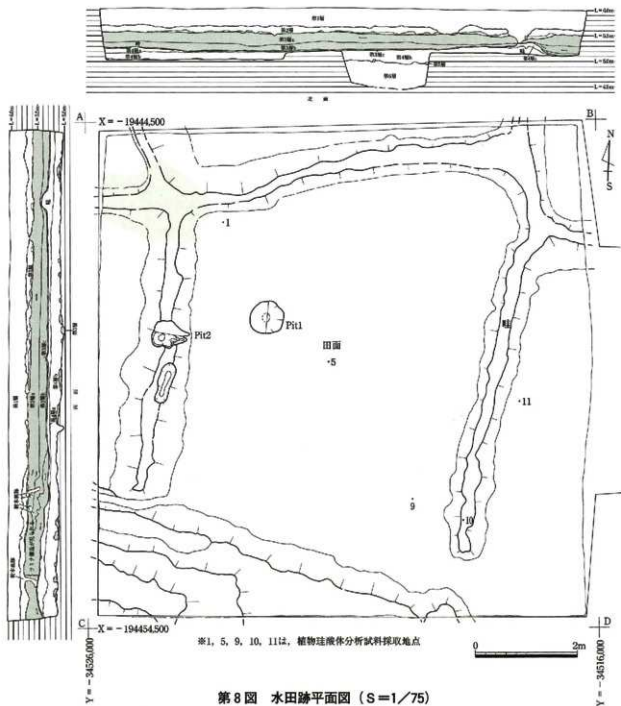
第7図 タイムスライス図1

東京工業大学大学院情報理工学研究所提供、一部加筆

面③と考えられる。

トレンチ北西の畦が十字になる部分では、平面図に示したとおり、焼土とカーボンが集中する範囲があった。火を焚いた痕跡と思われるが、焼土とカーボンは田面の表面だけでなく、土壌内にも含まれていたことから、水田形成以前にも火が焚かれたものと推定される。田面⑤は田面③、④に比べて約15cm低い。畦頭からは約25cmの高低差を測る。

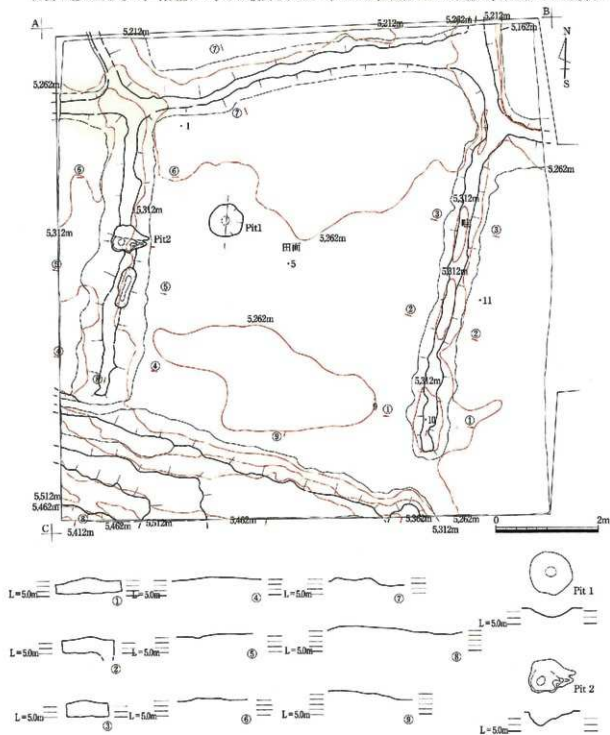
南側の階段状の遺構は、調査区外に広がっているため、全形は不明であるが、地中レーダ探査の結果を見る限り、幅約2.5m、長さ10m以上を測る。断面図⑧にあるように南側にも落ちることから、断面はなだらかなマウンドを呈するものと推測される。この部分からは、本来、第6層に帰属する古墳時代の土器も出土してい



第8図 水田跡平面図 (S=1/75)

ることから、この区画の形成時に下層まで掘削が及んだものと思われる。固結した紫コラを除去する際に、0.4 m²のコンボを調査区東側からトレンチ内に入れ作業を行った。その結果、コンボの重みで西側と北側の畦は一部潰れてしまい、埋没直前の畦の形態を正確には留めていない可能性が高い。東側の畦は調査区の外から紫コラを除去する作業を行ったため、西側と北側の畦と比べると変形の度合いが低いものと思われる。検出段階での畦の幅は、50~70cm、高さは約10cmを測り、断面は、かまぼこ状となる。残存する畦の断面形状は、第9図の①~⑨のとおりである。

西側の畦の上とそのすぐ東脇にピットが検出された。ピット1は直径約30cmの円形で、深さ約10cmを測る。



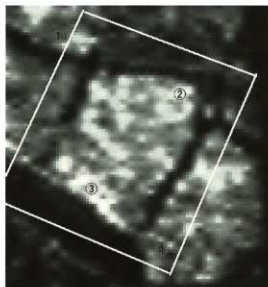
第9図 水田跡上面コンタ図 (S=1/75)・畦等断面図 (S=1/60)

埋土は、紫コラで最下層には火山礫が確認されたことから、埋設時にもともと窪んでいたものであることが判った。ピット2は、平面が不定形な形状を呈す。埋土は黒褐色の腐植土壌で、深さ約20cmを測る。いずれの窪みもその性格は判然としない。

4. 地中レーダ探査結果と発掘調査結果との照合

第10図の水田跡の各部分と検出状況の写真を比較してみると下記に示すとおりとなる。すでに平成7年度の調査結果との整合性から、埋没した水田の様相をとらえていることは明らかであったが、全体の形態はもちろん、例えば、水口、水尻での畦の途切れやピット1の位置など、細かい部分まで正確に反映していることが裏付けられた。

これらによって、今回調査していない範囲についても水田の面的な広がり、タイムスライス図のとおりと判断して矛盾はない。遺構の詳細を把握するには、発掘調査が必要であるが、今回の探査は、発掘調査に係る基礎データの収集にとどまらず、南部九州の律令制に伴う土地区画の状況を考察していく上で重要な意義と課題を提示する結果となった。それについては、後述する。



第10図 タイムスライス図2



写真4 畦の断面 (①)



写真5 畦の形状1 (②)



写真6 畦の形状2 (③)



写真7 畦の形状3 (④)

調査状況写真



写真8 水田跡検出状況1



写真9 水田跡検出状況2



写真10 水田跡検出状況3



写真11 地層の状況1



写真12 地層の状況2



写真13 地層の状況3

紫コラ
水田層



写真14 遺物出土状況



写真15 ビット検出状況

5. 自然科学分析について

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

(2) 試料

分析試料は、2区の紫コラ直下検出面から採取された5点である。試料採取箇所を第8図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- ①試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- ②試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- ③電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- ④超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- ⑤沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- ⑥封入剤 (オイキッパ) 中に分散してプレパラート作成
- ⑦検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-3}g) をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザザ節は0.48、チマキザ節・チシマザ節は0.75、ミヤコザ節は0.30である (杉山, 2000)。

(4) 分析結果

①分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および第11図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科一タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、ブナ科(アカガシ亜属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

(5) 考察

① 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

2区の紫コラ直下検出面では、試料1, 5, 9, 10, 11の5点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料11では密度が7,400個/gと高い値であり、試料1, 5, 9でも3,600~4,400個/gと比較的高い値である。したがって、同検出面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。畦畔上(試料10)では、密度が1,300個/gと比較的低い値である。ここで検出されたイネは、畦畔の際に畦畔に塗られた水田土壌に由来すると考えられる。

② 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

紫コラ直下検出面では、イネ以外にもススキ属型、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型などが検出された。また、樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)も部分的に少量検出された。おもな分類群の推定生産量によるとイネが優勢となっている。

以上のことから、紫コラ(西暦874年)直下層では、おもに稲作が行われており、周辺にはススキ属やチガヤ属、キビ族などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。周辺の植生などから、紫コラ直下の水田は常時滞水するような湿田ではなく、比較的水はけの良い乾田であった可能性が考えられる。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果、水田跡が検出された紫コラ(西暦874年)直下層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。

(文責 杉山)

文献

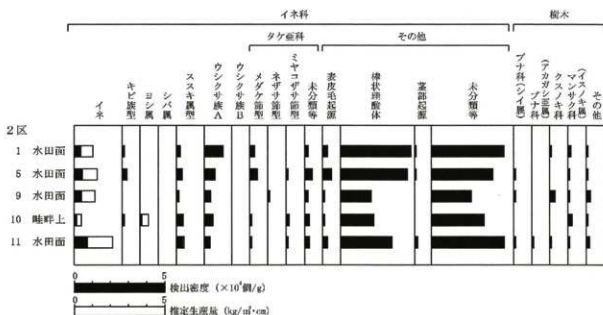
- 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p.109-123。
杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―。考古学と自然科学, 17, p.73-85。

表1 植物珪酸体分析結果

分類群	学名	2区				
		紫コラ直下検出面				
		1	5	9	10	11
イネ科	Graminoae (Grasses)					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	36	44	40	13	74
キビ族型	Panicaceae type	7	22		7	
コシ属	<i>Phragmites</i>				7	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	14	22	7	27	30
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	101	58	33	47	30
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
メダケ節型	<i>Fleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	22	36		7	7
ネザサ節型	<i>Fleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			7		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		7		13	7
未分類等	Others	14	36	13	20	22
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	22	44	7	7	22
棒状珪酸体	Rod-shaped	383	364	165	180	280
未分類等	Others	397	335	217	287	398
樹木起源	Arboreal					
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>		7	7		7
ブナ科(アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>					7
クスノキ科	Lauraceae	7		26		7
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	14	7	7	20	7
その他	Others	7	7	20	7	15
植物珪酸体総数	Total	1025	990	547	642	915

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2\cdot\text{cm}$) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

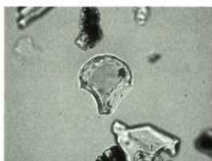
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.06	1.28	1.16	0.39	2.17
コシ属	<i>Phragmites</i>				0.42	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.18	0.27	0.08	0.33	0.37
メダケ節型	<i>Fleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.25	0.42		0.08	0.09
ネザサ節型	<i>Fleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			0.03		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.02		0.04	0.02



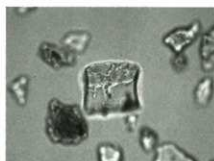
第11図 紫コラ直下検出面における植物珪酸体分析結果



イネ
1区検出面 試料7



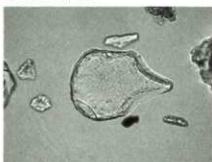
イネ
1区検出面 試料4



イネ(側面)
1区A地点 試料4



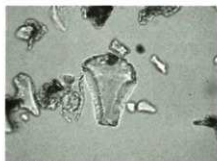
キビ族型
1区A地点 試料2



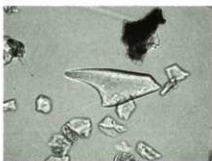
ヨシ属
1区検出面 試料4



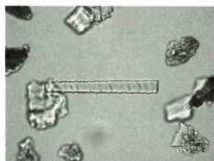
ススキ属型
1区A地点 試料1



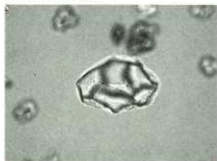
メダケ節型
2区検出面 試料1



表皮毛起源
2区検出面 試料5



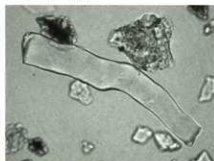
棒状珪酸体
2区検出面 試料5



ブナ科(シイ属)
1区検出面 試料7



クスノキ科
1区検出面 試料3



マンサク科(イスノキ属)
1区検出面 試料6

植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

50 μ m

写真16 検出された植物珪酸体 (参考)

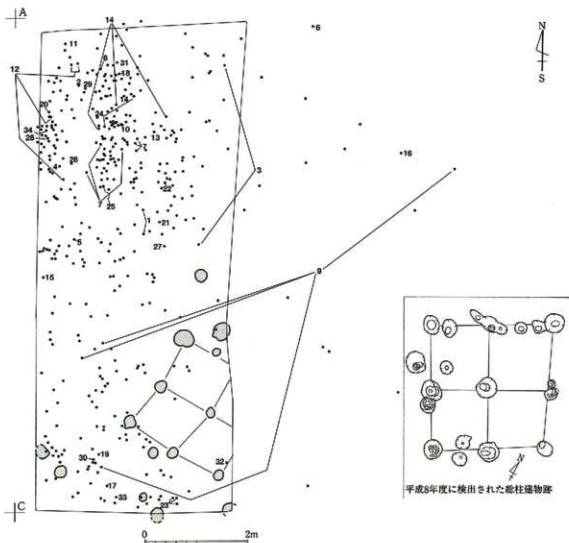
※ 1区は大学側調査区を示す。

6. 874年以前(奈良～平安時代)の遺構について

敷領遺跡では、水田形成以前に官衙的様相を帯びた遺構群の存在が知られている。本調査地点でもその手がかりを得るため、調査区の西側を第6層上面まで掘り下げた。平成8年、10年の調査地点でほぼ全面に確認された第5層(青コラ)は、ほとんど堆積していなかった。水田形成時、あるいはそれ以前に除去された可能性、または、洪水等の自然要因で流出した可能性が考えられるが、いずれも証左はない。

第6層上面で、第4層を埋土とする柱穴の可能性ある「しみ」を確認した。「しみ」は円形、または楕円形を呈し、これまでの調査で確認されている柱穴の検出状況と酷似する。しかし、先述のとおり第6層は湧水が見られ、「しみ」の断面の確認が困難であったことから平面の確認に留めざるをえなかった。従って、これらの「しみ」が遺構かどうかは判然としない。しかしながら、仮定の範囲を超えるものではないものの「しみ」を柱穴とみた場合、芯芯間が約1mの総柱建物跡のプランを想定することができる。この規模は、平成8年度の調査で検出された総柱建物跡に類似しており興味深い。遺物の出土状況からみても水田が営まれる以前に遺構があった可能性は高く、平成8年、10年に確認された官衙的様相を帯びた遺構群は、本調査地点まで広がるものと推定される。

(文責 渡部)



第12図 ビット検出状況図・遺物分布図 (S=1/75)

第2節 遺物について

本地点では、第4層、及び第6層から合計430点の遺物が出土した。いずれも破片資料である。遺物の種類別の内訳は土器425点、石器5点である。残存部位や破片の大きさ、遺物の特徴を考慮し、第4層から出土した遺物のうち32点を図化した。いずれも8世紀後半～9世紀前半頃に帰属すると思われる。

1. 須恵器

(1) 坏身 No. 1～No. 5

No. 1は、口縁部～底部の破片である。約1/5が残存していた。高台を有し、壘み付き部はほぼ平坦である。復元口径は、13.3cm、高さ4.8cmを測る。

No. 2～5は、口縁部の破片である。いずれも底部への屈曲部で破損している。

No. 1～No. 5はいずれも底部から口縁部へ向かってまっすぐ広がっており、口唇部は舌状になる。

(2) 坏蓋 No. 6

No. 6は、残存部位の状態からつまみを有すると判断できた。口縁端部は、わずかに外側に開きながら下に折れ曲がる。復元口径は、14.8cmを測る。

(3) 皿 No. 7, 8

No. 7, 8は、口縁部～底部の破片である。No. 7は復元口径15.9cm、高さ1.9cmを測り、安定した底部から直線的に口縁部がのびる。

No. 8は復元口径14.8cm、高さ2.6cmを測り、No. 7と比較すると底部の接地面がせまい。口縁部はわずかに外反する。

(4) 甕 No. 9, 10

No. 9は、口縁部、No. 10は、口縁部～胴部の破片である。ともに口縁部は外反する。No. 10は、還元焼成がにぶくやや肌色を帯びる。復元口径24cmを測る。

2. 土師器

(1) 坏 No. 11～No. 13

No. 11は、口縁部～底部の破片である。復元口径12.9cm、高さ4.2cmを測る。口縁部はわずかに外反する。

No. 12, 13は、口縁部の破片である。口縁部は直線的にのびる。No. 12の復元口径は13.2cmを測る。

(2) 甕 No. 14～No. 31

甕には、大別して、No. 14～20のように口縁部が外反し胴部内面にはヘラケズリが施されるものとNo. 20, 31のように口縁部への屈曲部分に突帯が巡るもの、No. 27のように古墳時代の成川式土器の形態を踏襲するもの3つがある。

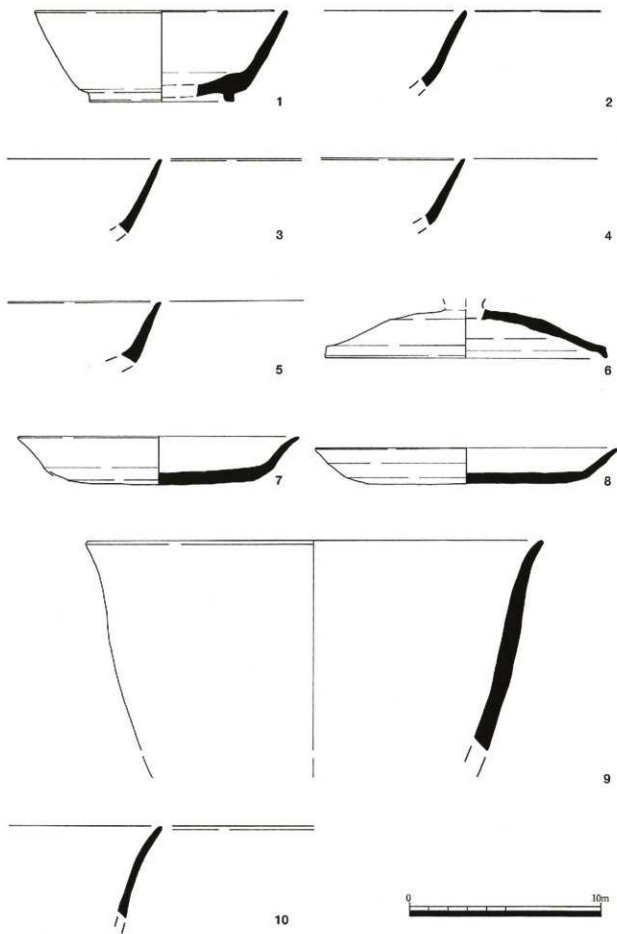
No. 14は、No. 17やNo. 19と比較すると薄手で、口縁部はややゆがみ、上面や屈曲部にはエビオサエの痕跡が残る。口唇部はやや丸みを帯びる。

No. 15, 16は口唇部の破片である。端部は舌状を呈する。

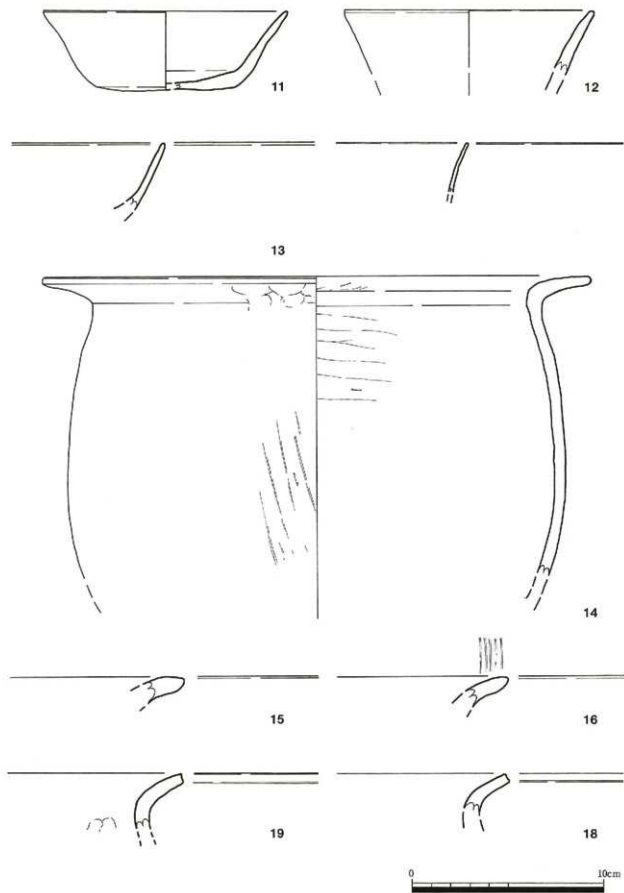
No. 17～19は、口唇部が平坦となるもので、No. 17は屈曲がゆるやかである。

No. 20, 30, 31は、外来系の甕の口縁部屈曲部分に「成川式土器」の属性である突帯が付加されたもので両者の折衷タイプである。No. 20, 31には、断面が丸みを帯びた絡状突帯が付く。No. 31の突帯、及びその直下の胴部には爪先で付けたようなキザミが見られる。No. 30の突帯は断面が三角形を呈する。

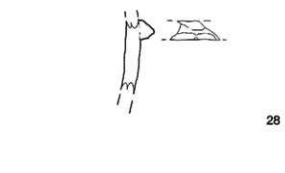
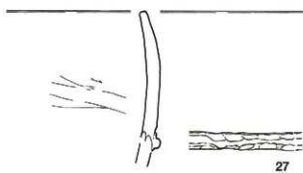
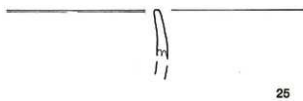
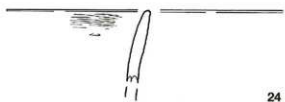
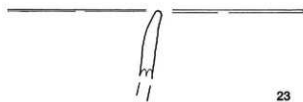
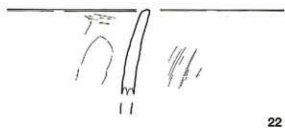
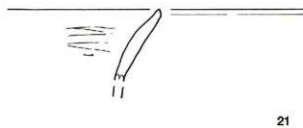
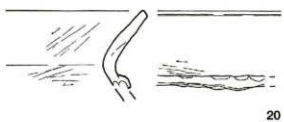
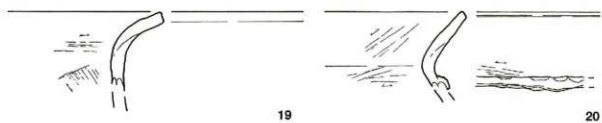
No. 27～29は絡状突帯が施されている。口縁部は、No. 22, 24のように舌状を呈するものとNo. 25～27のよう



第13図 出土遺物実測図1 (S=1/2)



第14图 出土遺物実測図2 (S=1/2)



第15图 出土遺物実測図3 (S=1/2)

に平坦となるものがある。また、口縁部が直立するものとやや内湾するものがある。

壺形土器は、平成8年度、10年度の調査や橋牟礼川遺跡でも発見されており、指宿地方では、古墳時代の伝統を汲む甕が8世紀後半まで存続することが指摘されている^[2]。(文責 渡部)

※ (2) 下山 覚「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる隔年の考察—「日本三代実録」貞観16年7月29日条についての考古学的アプローチ」『古文化談義』九州古文化研究会 1993

3. 石器

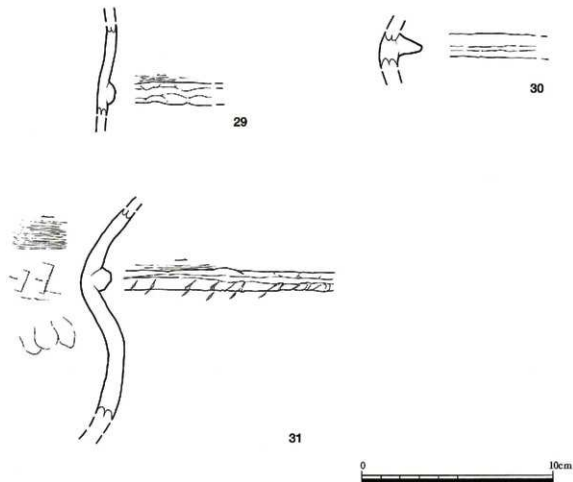
(1) 軽石製加工品

№32 は、a 面下端部が円弧状を呈し、上端部は欠損している。本来の形状は円形あるいは楕円形を呈していたものと考えられる。最大長 11.5 cm、最大幅 10.2 cm、最大厚 6.3 cm、重さ 140 g を測る。

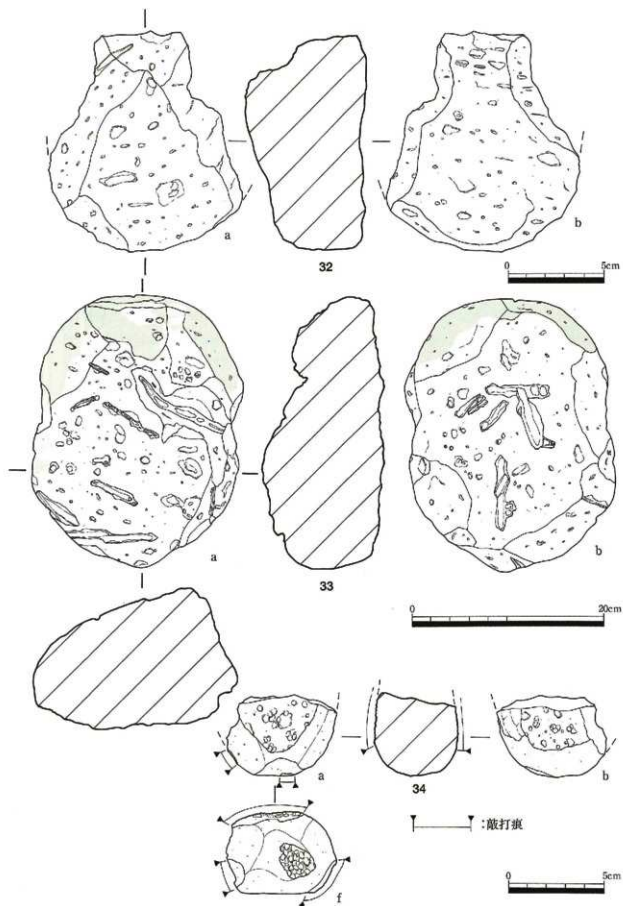
№33 は、最大長 27.8 cm、最大幅 22 cm、最大厚 12.4 cm、重さ 2,400 g を測る楕円形を呈した軽石製加工品である。周縁には整形を目的とした加工面が認められる。また、a 面・b 面には、棒状工具によると思われる加工痕が認められる。a 面・b 面上端部と a 面左側面の整形の加工面部分には、他の面と比較して赤色を呈し場所によっては赤色の濃淡差もある。顔料分析はしていないものの、顔料を塗彩している可能性が考えられる。

(2) 敲石

№34 は、a・b・f 面に敲打痕がある敲石である。a 面上部は欠損し、本来は楕円形あるいは棒状を呈していたものと考えられる。最大長 4.2 cm、最大幅 5.8 cm、最大厚 4.3 cm、重さ 150 g を測る。(文責 鎌田)



第16図 出土遺物実測図4 (S=1/2)



第17図 出土遺物実測図5 (32, 34はS=1/2, 33はS=1/4)

表2 遺物観察表1

図号	出土状況	器種	検出位置(m)	形状	色	外	内	色	内	色	底	出土状況	調査期	調査	その他	遺品	検出
1	66	須恵器杯	口径12.3 底径7.7 高さ6	口縁部 ～底部	2.515/1	7.515/1	2.515/1					須恵器を若干含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ 底・ヒョウナブ 高さ足込み・ナブ	浅成良母 餅きギモン	4b	67
2	41	須恵器杯	破片	口縁部 ～縁部	7.515/1	517/1	1015/2					須恵器を若干含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	浅成良母 餅きギモン	4b	
3	292	須恵器杯	破片	口縁部 ～縁部	515/1	515/1	515/1					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	浅成良母 餅きギモン	4b	328
4	296	須恵器杯	破片	口縁部 ～縁部	51/0	55/0	55/1					須恵器を若干含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	浅成良母 餅きギモン	4b	
5	373	須恵器杯	破片	口縁部 ～縁部	515/1	2.515/2	2.515/2					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	良母 餅きギモン	4b	
6	55	須恵器碗	破片 口径14.8	口縁部 ～縁部	51/0	51/0	55/0					須恵器を若干含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	良母	4b	
7	46	須恵器鉢	破片 口径15.9 高さ9	口縁部 ～縁部	517/1	517/1	515/1					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ 底・同輪ナブ 高さヒョウナブ のナブ	良母	4b	174,177 252,253, 254
8	158	須恵器蓋	破片 口径14.8 高さ6	口縁部 ～縁部	7.515/1	7.515/1	1015/1					須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ 底・同輪ナブ 高さヒョウナブ のナブ	良母	4b	
9	16	須恵器甕	破片 口径24	口縁部 ～縁部	1315/2	1315/2	1015/2					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	不具	4b	54,55,57
10	169	須恵器甕	破片 口径12.9 高さ4.2	口縁部 ～縁部	7.515/4	7.515/2	1015/2	底 7.515/4				砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地 白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	良母	4b	
11	195	土師器杯	破片 口径12.2	口縁部 ～底部	515/0	515/0	51/1					砂粒を若干含む 須恵器を含む 須恵器を含む	白・黒地 白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	良母 餅きギモン	4b	201
12	30	土師器杯	破片 口径12.2	口縁部	7.515/1	51/0	515/1					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地	内・同輪ナブ 外・同輪ナブ	良母 餅きギモン	4b	133,147 151
13	200	土師器杯	破片 口径12.2	口縁部	7.515/1	7.515/4	7.515/2					須恵器をわずかに含む	白・黒地	内・ナブのみ摩滅 外・ナブのみ摩滅	良母 餅きギモン	4b	
14	229	土師器甕	破片 口径28.8	口縁部 ～縁部	7.515/2	7.515/2	1015/1					砂粒をわずかに含む ひねり筋を含む 須恵器を含む	白・黒地 白・黒地	内・工具によるナブ のナブ 外・工具によるナブ のナブ 底・ナブ	良母	4b	352,412 456
15	113	土師器甕	破片	口縁部	7.515/4	515/4	7.515-4					砂粒をわずかに含む ひねり筋を若干含む	白・黒地 白・黒地	内・ナブ 外・ナブ	良母 餅きギモン	4b	
16	90	土師器甕	破片	口縁部	7.515/4	7.515/4	1015/4					砂粒をわずかに含む ひねり筋を若干含む	白・黒地 白・黒地	内・工具によるナブ のナブ 外・ナブ	良母 餅きギモン	4b	

表3 遺物観察表2

図号	取上げNo.	器種	保存法量(cm)	部位	色	外	色	内	色	内	色	胎	胎土粒	埋藏期	調整	その他	層位	割合
17	200	土師器類	瓶片	口縁部	5YR5/4		5YR5/6		5YR6/6				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 外・ナブ 口縁・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	
18	160	土師器類	瓶片	口縁部	5YR4/4		2.5YR5/6		2.5YR4/4				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 外・ナブ 口縁・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	162
19	330	土師器類	瓶片	口縁部	5YR5/4		5YR4/6		5YR4/4				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 外・ナブ ナブのちナブ 口縁・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	
20	233	土師器類	瓶片	口縁部 ～突帯 部	7.5YR5/3		7.5YR4/2		10YR5/2				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 外・工具による ナブのちナブ 突・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	
21	375	土師器類	瓶片	口縁部	5YR4/3		2.5YR4/3		7.5YR4/3				細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 外・工具による ナブのちナブ	良好 優きギ モン	4b	
22	206	土師器類	瓶片	口縁部	5YR4/4		5YR4/3		7.5YR4/2				細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・白・ 黒 他	内・工具による ナブのちナブ 外・工具による ナブのちナブ	良好 優きギ モン	4b	
23	233	土師器類	瓶片	口縁部	7.5YR4/2		2.5YR4/2		2.5YR4/2				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・ナブ	良好 優きギ モン	4b	
24	3	土師器類	瓶片	口縁部	2.5YR5/4		5YR4/3		2.5YR4/2				細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・工具による ナブのちナブ	良好 優きギ モン	4b	167,172
25	361	土師器類	瓶片	口縁部	2.5YR4/4		10YR4/1		2.5YR4/4				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・ナブ	良好 優きギ モン	4b	
26	134	土師器類	瓶片	口縁部	5YR5/3		5YR4/2		7.5YR5/3				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・ナブ	良好 優きギ モン	4b	
27	379	土師器類	瓶片	口縁部 ～突帯 部	2.5YR4/4		7.5YR4/2		7.5YR4/2				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・工具による ナブのちナブ 突・ヨコナブの ち無類によるツ メミ	良好 優きギ モン	4b	
28	366	土師器類	瓶片	突帯部	2.5YR5/3		2.5YR4/3		10YR5/3				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・ナブ 突・ヨコナブの ち段帯によるツ メミ	良好 優きギ モン	4b	
29	153	土師器類	瓶片	突帯部	5YR3/2		7.5YR5/3		7.5YR5/3				砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む 粗砂粒を若干含む	カ・白・ 黒 他	内・ナブ 外・工具による ナブのちナブ 突・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	
30	416	土師器類	瓶片	突帯部	5YR4/6		7.5YR5/4		2.5YR4/1				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・ナブ 突・ヨコナブ	良好 優きギ モン	4b	
31	74	土師器類	瓶片	突帯部 ～胴部	5YR4/4		5YR4/4		10YR5/2				砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による ナブのちナブ 外・ナブ 突・ヨコナブの ちナブ	良好 優きギ モン	4b	

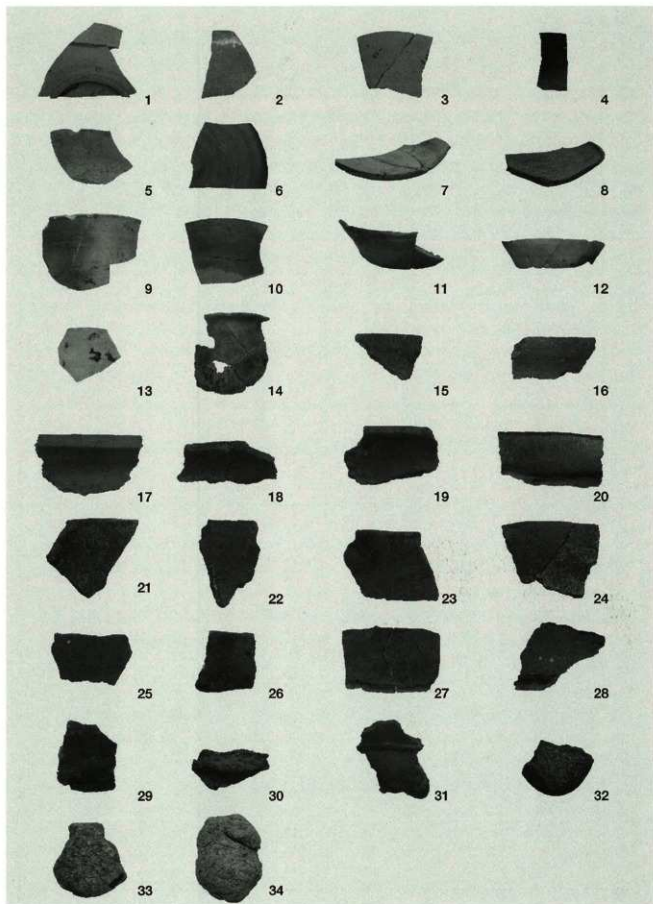


写真17 出土遺物

第5章 まとめ

青コラと茶コラの2層の火山灰に挟まれた第4層は、7世紀第4四半期から874年(9世紀後半)までの約200年の時間幅をもつ。橋牟礼川遺跡では、この約200年間を遺物の年代観を参考にA期:青コラ降灰〜8世紀前半まで、B期:須恵器、土師器の供給が増える8世紀後半〜9世紀前半まで、C期:9世紀後半〜874年まで、の3期に区分してとらえその変遷が考察されている¹³⁾。敷原遺跡においても、第4層から出土する遺物の年代が概ね8世紀後半〜9世紀前半に該当することから、官製の塚相を帯びた遺構群の時期をB期、水田が営まれた時期をC期にあてはめることが可能である。以下、時期ごとに記しまとめとする。

B期、水田形成以前について

B期については、平成8、10年の調査でも雨落ち溝をもつ独立柱建物群や総柱建物跡等の遺構、墨書土器や転用硯、亀卜に関わる甲台と考えられる鉄製品等注目すべき知見が得られている。今回、可能性の域をでないものの、柱穴と見られる「しみ」から総柱建物跡のプランを想定することができ、遺構群が広がる可能性が示唆された。須恵器や内面ヘラケズリの丸底の甕等、遺物のありようから見てもその可能性は高いと考えられる。

C期、埋没水田について

地中レーダ探査から、約2300㎡について埋没水田の状況を把握することができた。ここで注目したいのが、第18図に表示した畦A、Bである。畦Aは、平成10年度に検出された畦に繋がるものと推定され、延長は約98mを測る。また、畦Bは、地中レーダ探査で確認できた範囲で約57.5mを測る。畦A、B間の間隔は、約17.5mで、両者は平行して南北方向に直線的に造られている。

延暦19年(西暦800年)12月『類聚国史』には、「取大隅薩摩両国百姓班田、便授口分。」と記され、大隅国、薩摩国に班田収受制が施行されたことが伺える。指宿郡においても、西暦800年には条里制地割に基づき口分田が与えられたものと思われるが、南部九州においては、薩摩国府跡が6町方城と推定されている他、条里制の実態については現段階では考古学的な証拠がほとんど得られていない。これらを踏まえ、畦A、Bを見ると、真北方向に2つの畦が平行して、推定約98mも直線的に造られている状態は、条里制地割との因果関係を視野に含めて検討すべき事例と評価できる。さて、一坪の区画の中は、長地型地割、あるいは半折型地割によって10等分され、1段となる。班田収受制では、男子は2段、女子はその2/3、奴婢にはそれぞれの1/3が支給された。長地型地割では、1段は10.9m×109m、半折型地割では、21.8m×54.5mとなる。畦A-B間の間隔約17.5mは、誤差はあるものの、長地型地割の場合、長辺109mを概ね6分割、半折型地割の場合、長辺54.5mを概ね3分割した長さになる。畦A-B間の間隔が、1段の長辺を概ね6あるいは3に分割できる長さに該当することにも注視しておきたい¹⁴⁾。

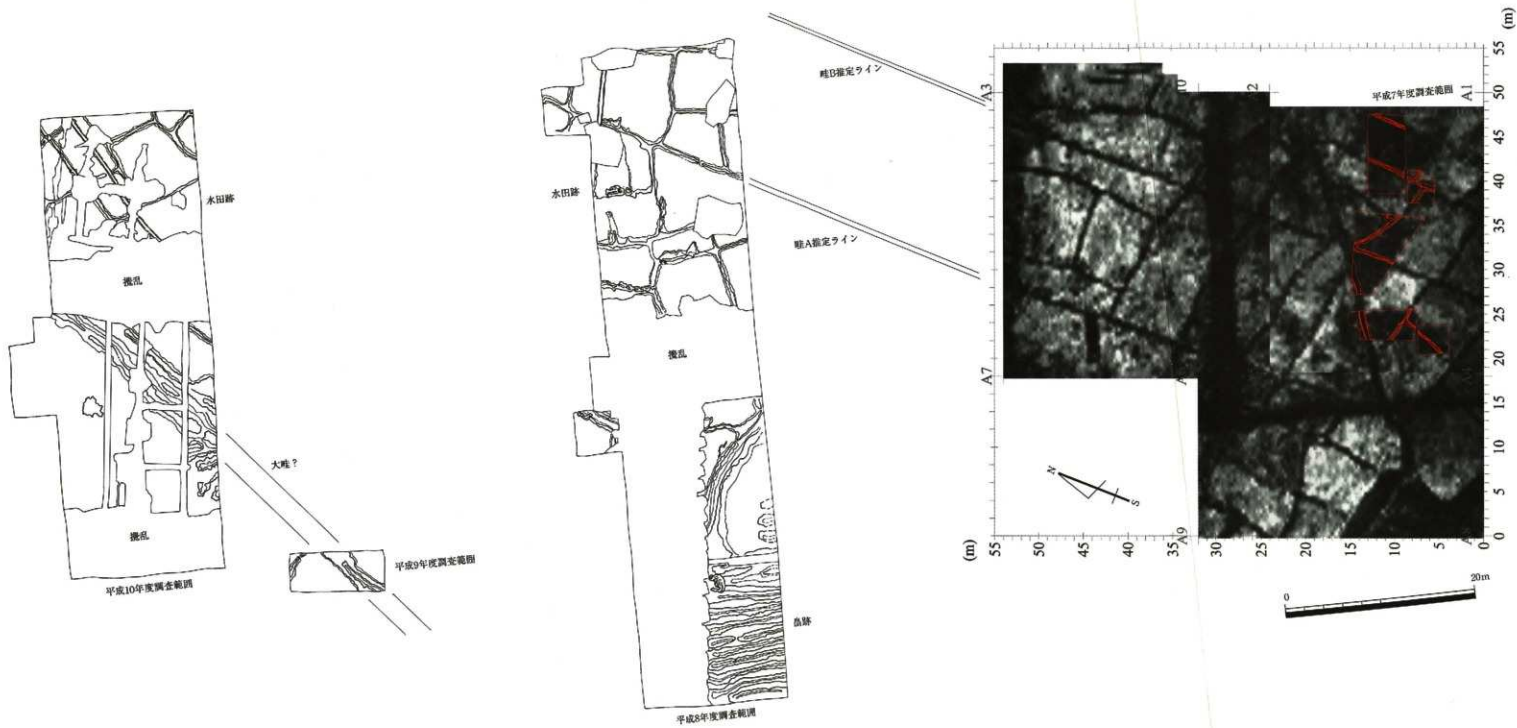
No.33の軽石加工品は、土壤中に完全に埋没しておらず、上面が顔を出した状態で南側の階段状の畦から出土した。平成7年度の調査区からは、水口から面取りされた軽石加工品が出土しており、祭祀に用いられた可能性が指摘されている。No.33の表面には赤色顔料のようなものが付着しており今後分析を急ぎたい。

今回の調査で、874年段階の指宿郡における条里制の一端を知る手がかりが得られた。火山灰下に1町の区画が残存しているのか、残っていただろうのとうな形態なのかを確認することが先決である。遺跡の評価をする上で重要な課題が提出され、同時に地中レーダ探査によって把握できる可能性が高いとの展望も開けた。今後の調査に期待したい。

(文責 渡部)

※ (3) 前掲(2)と同じ。

※ (4) 東一幸氏の示唆による。



第18図 水田跡検出状況全体図 (S=1/400)

■参考資料編■

第1章 調査に至る経緯と調査概要

平成17年3月、敷領遺跡地内でアパート建設が計画され、遺物包含層に混入が及ぶ浄化槽設置部分について緊急に確認調査を実施した。なお、確認調査編では、平成18年度刊行予定の科学研究費の報告書に合わせ、上位のものから順に層の標記を行っているが、これまで指宿市街地の発掘調査では、橋幸礼川遺跡の標準層位を基準に層名を決定してきた経緯があるため、それにない報告する。



写真18 調査区全景

- 調査期間 平成17年3月7日～平成17年3月11日
- 調査地点 指宿市十町2268-2
- 調査面積 32.8㎡
- 調査担当 鎌田洋昭 中塚浩太郎

調査地点は、弥次ヶ湯古墳の西側、直線距離で約600mのところ、古墳時代の集落遺跡である迫田遺跡が近接する。調査地点の標高は、約20mである。重機による表土、及び紫コラの除去を行い、現地地下2.5mまで掘り下げ確認調査を実施した。

(文責 渡部)



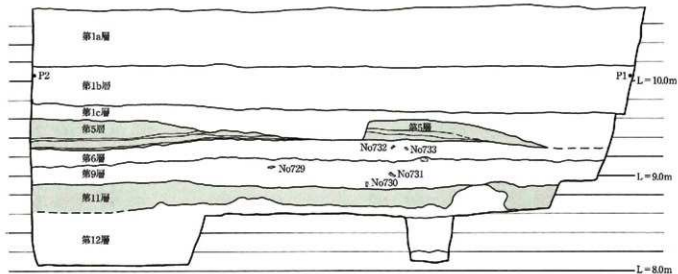
第19図 調査地点図 (S=1/5000)

第2章 調査地点の層位

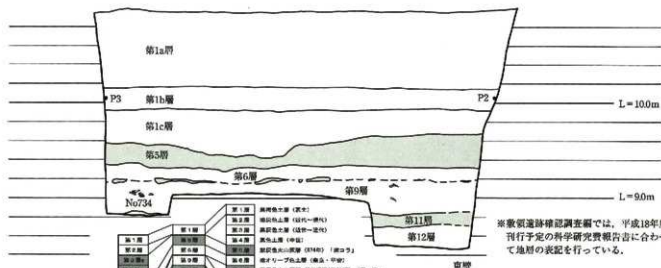
確認した層について下記に記す。

- 第1層：表土である。旧地表面の上位には建設に先立つ盛土がされている。
- 第5層：開聞岳火山性噴出物の「紫コラ」である。部分的に削平されている。
- 第6層：「紫コラ」直下層面は、橋や札川遺跡や敷領遺跡で検出されている島跡や水田跡は確認できなかった。調査区中央部分が最も高く、東西側に緩やかに傾斜している状況が窺えた。
- 第9層：古墳時代の遺物包含層である。層厚約20cm内に成川式土器を主体とする遺物が多量に出土した。特に下位付近に出土ピークがあり、土器集中廃棄所の可能性もある。第6層と第9層の間には、本来的には「青コラ」が堆積していたと考えられるが、この地点では確認されなかった。
- 第11層：弥生時代中期頃に噴出した開聞岳火山性噴出物の「暗紫コラ」である。
- 第12層：遺物は確認されなかった。

(文責 鎌田・渡部)



南壁



※敷領遺跡確認調査報告では、平成18年度
刊行予定の科学研究費報告書に合わせて
地層の表記を行っている。

第1層	表土
第2層	埋土層
第3層	埋土層
第4層	埋土層
第5層	紫コラ
第6層	紫コラ直下層
第7層	埋土層
第8層	埋土層
第9層	成川式土器層
第10層	埋土層
第11層	暗紫コラ
第12層	埋土層

第1層	表土
第2層	埋土層
第3層	埋土層
第4層	埋土層
第5層	紫コラ
第6層	紫コラ直下層
第7層	埋土層
第8層	埋土層
第9層	成川式土器層
第10層	埋土層
第11層	暗紫コラ
第12層	埋土層

第1層	表土	弥生時代前期-後期
第2層	埋土層	弥生時代前期-後期
第3層	埋土層	弥生時代前期-後期
第4層	埋土層	弥生時代前期-後期
第5層	紫コラ	弥生時代前期-後期
第6層	紫コラ直下層	弥生時代前期-後期
第7層	埋土層	弥生時代前期-後期
第8層	埋土層	弥生時代前期-後期
第9層	成川式土器層	弥生時代前期-後期
第10層	埋土層	弥生時代前期-後期
第11層	暗紫コラ	弥生時代中期
第12層	埋土層	弥生時代前期-後期

第20図 層位断面図 (S=1/40)

第3章 調査の成果

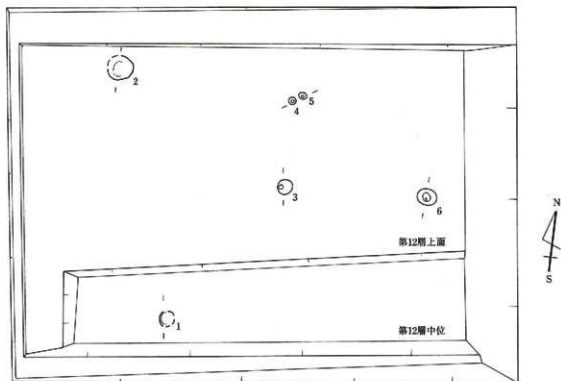
第1節 遺構について

第12層の上面で第9層を埋土とするピット6基を
確認した。調査面積が狭いこともあり、プランの確認
はできなかったが、遺物の出土状況から、付近に住居
跡等の遺構の存在が想定される。

(文責 波部)

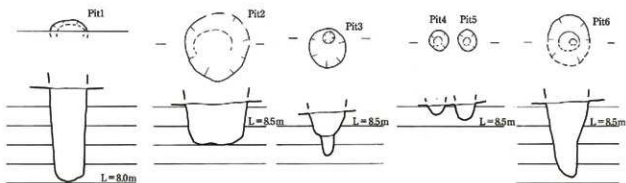
表4 ピット測量表

ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	19+α	19+α	49.5
2	35	33	23
3	21	19	24
4	11	10	5.5
5	11	10	9.5
6	27	21	40



調査区平面 (S=1/50)

0 1m



第21図 ピット平面図・断面図 (S=1/20)

0 50cm

第2節 遺物について

第6層中からは、148点の遺物が出土した。土師器が主体を占め、第9層に帰属する土器も一部含まれる。いずれも破片資料である。第9層からは、789点の遺物を取り上げた。成川式土器を主体としており、甕、壺、埴、高杯などが認められる。また、砥石、くぼみ石、軽石製加工品等の石器も出土した。残存部位や破片の大きさ、遺物の特徴を考慮し、第9層から出土した遺物のうち77点を図化した。

1. 土器

(1) 甕、および鉢 No.1～No.44

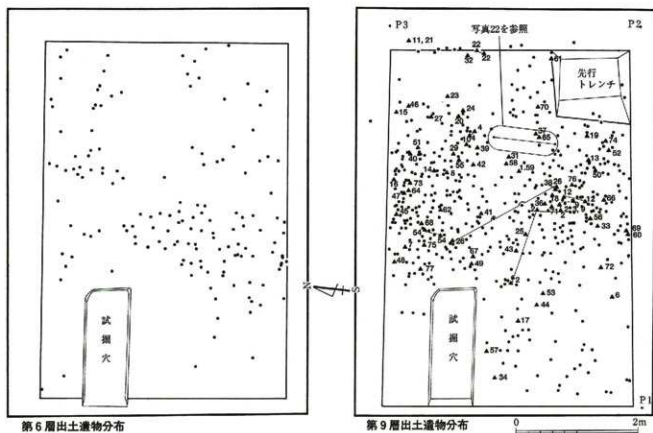
No.1は、甕形土器の口縁部～底部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は、平坦に仕上げられている。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。底部見込み部はかまぼこ状を呈する。

No.2, 3は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は、平坦に仕上げられている。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。

No.4は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は、舌状となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。

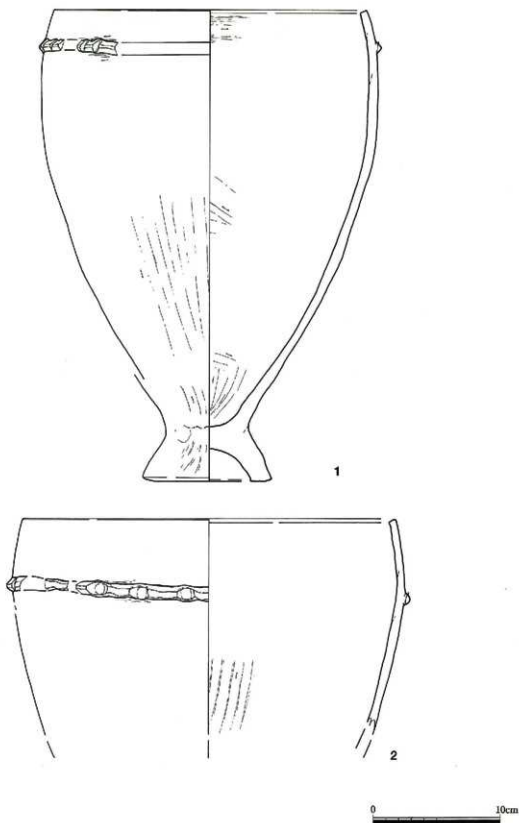
No.5, 6は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は、平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。

No.7は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部外面が

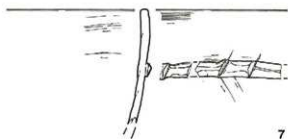
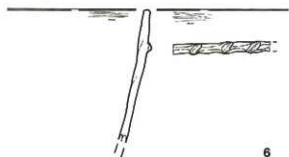
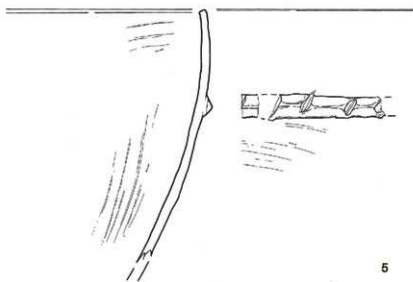
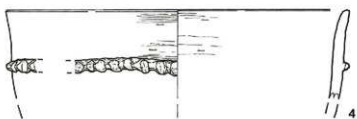
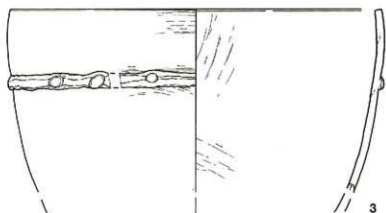


第22図 遺物分布図 (S=2/125)

- は、わずかに窪む。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。
- No. 8 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯は上下にずれて重なり、棒状具による刻みが施されている。
- No. 9 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。
- No. 10, 11 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口縁部外面が窪む。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には棒状具による刻みが施されている。No. 10 の口唇部は平坦に No. 11 の口唇部は丸みを帯びる。
- No. 12 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 13 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は舌状となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯は上下にずれて接しない。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 14, 15 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 16 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、工具による刻みが施されている。
- No. 17 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は舌状となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯はやや下方に向き、棒状具による刻みが施されている。
- No. 18, 19 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は舌状となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 20, 21 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。No. 20 の口唇部は舌状に No. 21 の口唇部は平坦に仕上げられている。
- No. 22, 23 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は内湾し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 24 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は内湾し、口唇部はやや丸みを帯びる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 25 は、壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部は突帯を境に外反し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。突帯には、棒状具による刻みが施されている。
- No. 26 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐるが、残存範囲には刻みが見られない。
- No. 27～No. 29 は突帯をもたないタイプの甕である。
- No. 27 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はラッパ状に開きながら直行し、口唇部は舌状となる。他の壺形土器に比べて器肉が薄い。
- No. 28 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は直行し、口唇部はほぼ平坦となる。
- No. 29 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は内湾し、口唇部は平坦となる。
- No. 30 は、壺形土器の底部～胴部の破片である。平底である。内面には部分的にカーボンが付着している。
- No. 31, 32 は、壺形土器の底部～胴部の破片である。底部見込み部はわずかに窪む程度で浅い。No. 31 は鉢形



第23図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



0 10cm

第24図 出土遺物実測図2 (S=1/3)

土器の可能性もある。

No. 33 は、壘形土器の底部の破片である。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。

No. 34～36 は、壘形土器の底部の破片である。底部は上げ底で、見込み部の天井部分は平坦となり、断面は台形を呈する。

No. 37～40 は、壘形土器の底部の破片である。底部は大きく上げ底となり、見込み部の断面は山形を呈する。

No. 41 は、鉢形土器の底部の破片である。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。

No. 42 は、鉢形土器の底部の破片と思われる。底部は上げ底で、見込み部の天井部分は平坦となり、断面は台形を呈する。

No. 43 は、鉢形土器の底部の破片である。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。

No. 44 は、鉢形土器の底部の破片である。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。

(2) 壺 No. 45～No. 54, 56

No. 45 は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びる。肩部から胴部にかけて緩やかに膨らみをもつ。突帯はもたない。

No. 46, 47 は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反し、口唇部は舌状を呈する。

No. 48, 49 は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げられている。

No. 50, 51 は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反し、外側に屈曲する。No. 50 の口唇部は平坦に仕上げられ、No. 51 は、平坦に仕上げられている。

No. 52 は、壺形土器の底部～胴部の破片である。丸底を呈し、内面にはミガキが施される。

No. 53, 54 は、壺形土器の底部の破片である。丸みを帯びながらも、いずれも底面端部に狭い平坦面をもつ。

No. 56 は、壺形土器の肩部～胴部の破片である。胴部は球形に膨らむ。

(3) 埴 No. 57, No. 58

No. 57 は、埴形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は舌状に尖る。内外面ともに赤色塗彩された痕跡が残る。

No. 58 は、埴形土器の肩部～底部の破片である。そろばん玉状に胴部が膨らみ、胴部最大径は7.7cmを測る。底部はわずかな平坦面があるものの丸底である。

(4) 高坏 No. 59～No. 70

No. 59 は、高坏形土器の坏部の破片である。口唇部は平坦に仕上げられている。

No. 60 は、高坏形土器の坏部の破片である。外面に屈曲部があり、明瞭に稜線が認められる。

No. 61 は、高坏形土器の坏部の破片である。口唇部は平坦に仕上げられている。

No. 62 は、高坏形土器の坏部の破片である。口唇部は舌状に尖る。

No. 63 は、高坏形土器の坏部の破片である。口唇部は丸みを帯び、赤色塗彩の痕跡が残る。

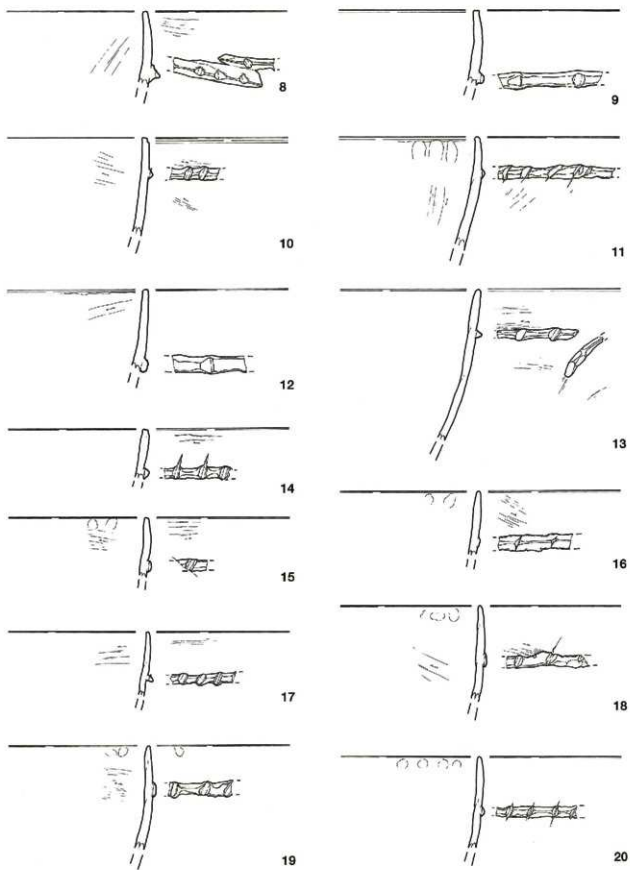
No. 64 は、高坏形土器の坏部～底部の破片である。底部の裾は広がらず、狭い、あるいは鉢の底部のような形態をとり、脚部も筒状を呈さない。見込み部の断面は山形を呈する。

No. 65 は、高坏形土器の脚部～底部の破片である。脚部から底部にかけてなだらかに広がる。外面に赤色塗彩された痕跡が残る。見込み部の断面はベル状を呈する。

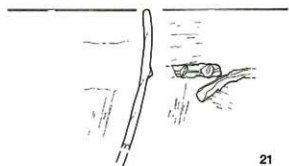
No. 66 は、高坏形土器の脚部～底部の破片である。外面にはミガキが施されている。

No. 67 は、高坏形土器の脚部～底部の破片である。脚部から底部にかけてなだらかに広がるが、脚部は短い。

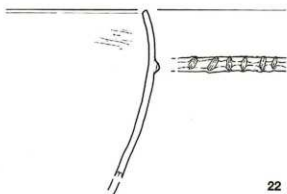
No. 68 は、高坏形土器の脚部～底部の破片である。脚部は筒状をなし底部へ屈曲し、内外面に稜線が認められる。



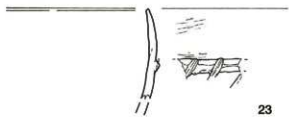
第25図 出土遺物実測図3 (S=1/3)



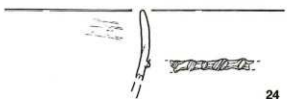
21



22



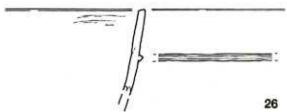
23



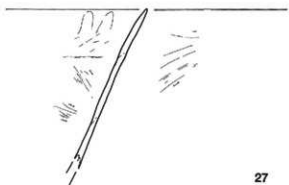
24



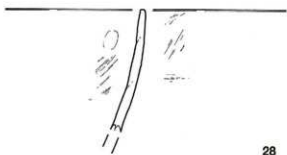
25



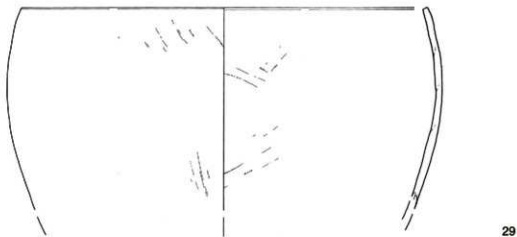
26



27



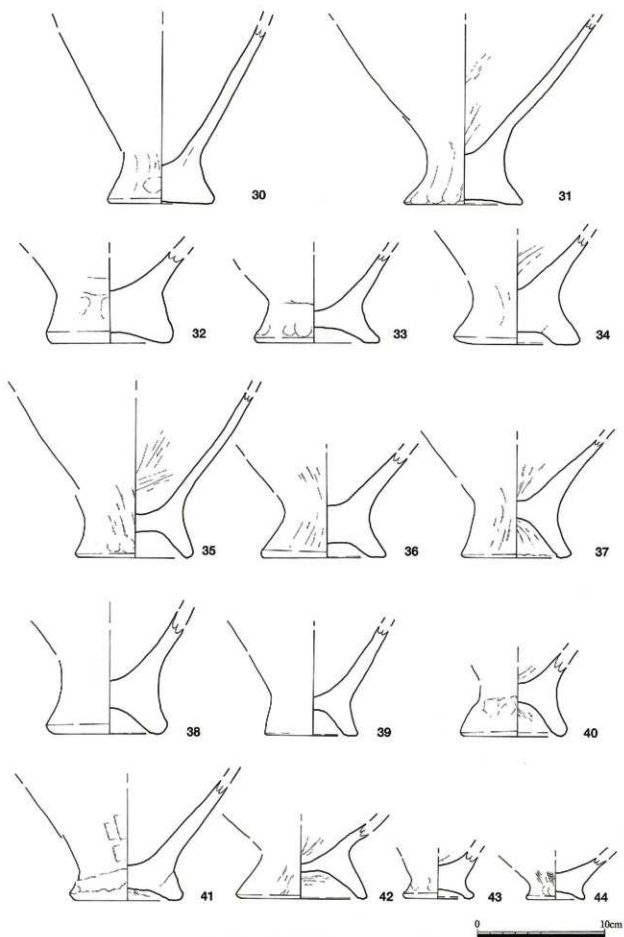
28



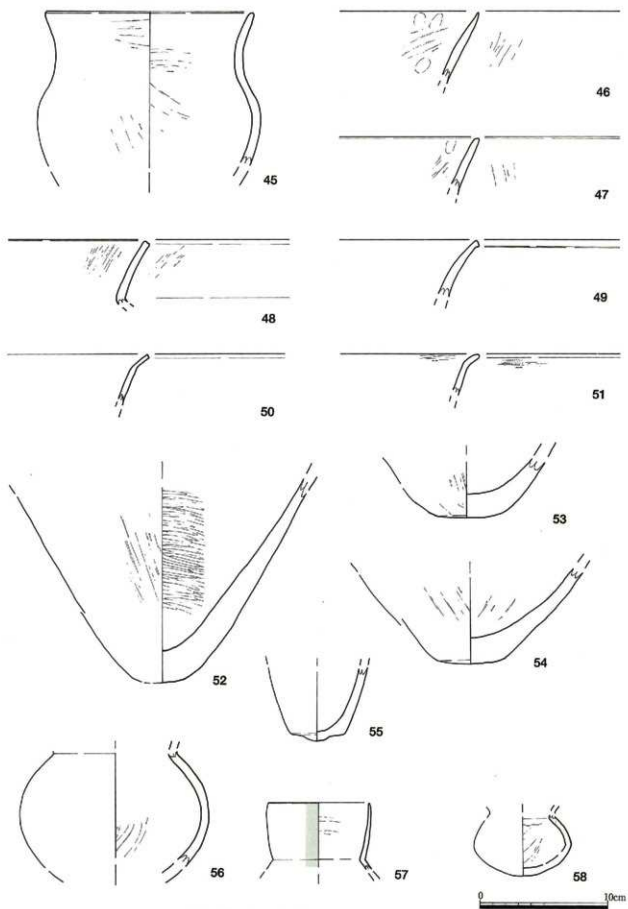
29

0 10cm

第26図 出土遺物実測図4 (S=1/3)



第27图 出土遗物实测图5 (S=1/3)



第28图 出土遺物実測図6 (S=1/3)

見込み部の天井はほぼ平坦となる。

No. 69 は、高环形土器の脚部の破片である。脚部は円錐状に伸び、見込み部の断面はベル状を呈する。

No. 70 は、高环形土器の底部の破片である。内外面ともにミガキが施されている。

(5) その他 No. 55, No. 71, No. 72

No. 55 は、コップ形を呈する土器の胴部～底部の破片である。底面には、マウンド状の突起が付けられている。

No. 71 は、高环形土器のミニチュアで、脚部の破片である。筒状を呈し、外面に赤色塗彩された痕跡が残る。

No. 72 は、高环形土器の脚部を転用した輪の羽口の破片と推定される。内面にカーボンが付着している。

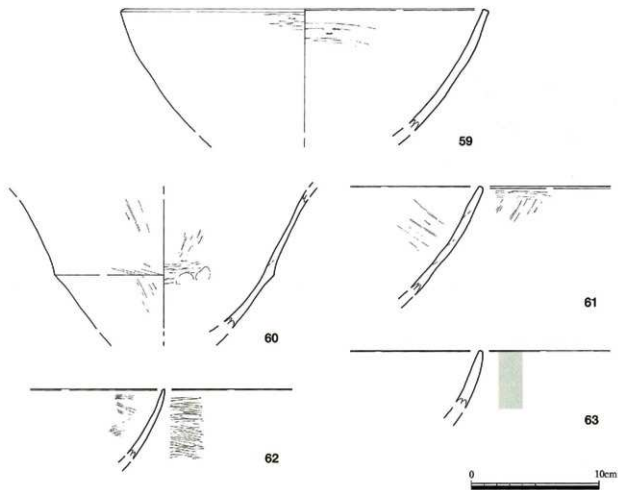
(文責 渡部)

2. 石器

(1) 礫石 No.73~75

No.73 は、両側辺が撥状を呈しており、その c 面と d 面に砥面が認められる。No.74 と同様、砂岩の自然礫をそのまま礫石として用いている。最大長 9cm, 最大幅 5.3cm, 最大厚 2.2cm, 重さ 120g を測る。

No.74 は、a 面と d 面に砥面が認められる。また、a 面右下端部には敲打痕が認められることから、研ぐ、敲くの機能を有する石器である。b 面右側縁と下端部には連続した剥離痕が認められるが、石器整形を目的としたものではなく、敲打による痕跡であると考えられる。a 面上端部は欠損している。最大長 5.3cm, 最大幅 4.1cm,



第29図 出土遺物実測図7 (S=1/3)

最大厚 1.5 cm, 重さ 50g を測る。石材は安山岩である。

№75 は、板状を呈する砥石である。砥面は a 面のみであり一部は若干僅みが見られる。また、砥面には散条の削痕が認められる。a 面上部と下部は欠損しており、いずれも a 面側から加撃によるものである。最大長 13.5 cm, 最大幅 8.3 cm, 最大厚 2.3 cm, 重さ 215g を測る。石材は砂岩である。

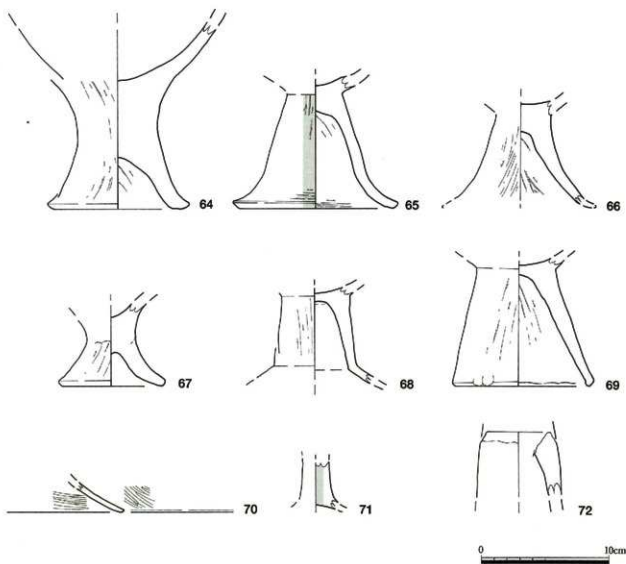
(2) 磨石

№76 は、楕円形を呈した磨石である。b 面に磨面が、a 面中央部には敲打痕と数条の擦痕が認められる。よって、磨く、敲く、砥ぐという機能を持った石器である。最大長 11.6 cm, 最大幅 8.1 cm, 最大厚 4.2 cm, 重さ 310g を測る。石材は砂岩である。

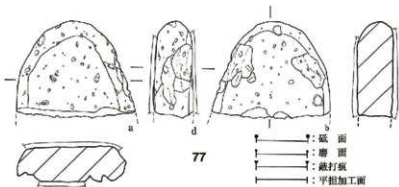
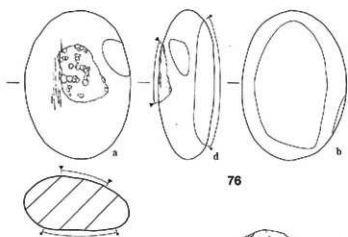
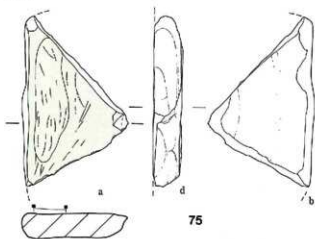
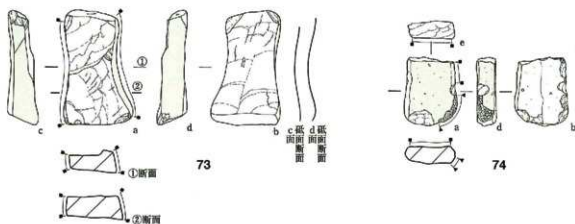
(3) 軽石製加工品

№77 は、a 面と b 面に平坦面を有する軽石製加工品である。a 面下端部は欠損しているが、本来は楕円形を呈していたと考えられる。b 面両側縁には b 面側と a 面側からの壘形土加撃による剝離痕が認められる。最大長 7.6 cm, 最大幅 9.2 cm, 最大厚 3.1 cm, 重さ 100g を測る。

(文責 鎌田)



第30図 出土遺物実測図8 (S=1/3)



0 10cm

第31圖 出土遺物実測図9 (S=1/3)

表6 遺物観察表2

品名	取上げ地	種類	資料数量 (個)	形状	色	外	色	内	色	向	色	他	用途	調査	その他	層位	備考	
19	425	美形土器	破片	口縁部 ～胴部 底	9783/1	9784/2	7.9783/6						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外に「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好	9	
20	303	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	2.9785/4	2.9786/4	3.9784/3						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外・ 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好	9	
21	734	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	9784/2	2.9786/4	7.9786/2						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好	9	
22	507	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	7.9785/2	9786/3	10784/4						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好	9	508
23	552	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	9784/3	9784/3	9784/3						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
24	407	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	9785/4	9786/4	7.9784/2						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
25	236	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	10785/2	10786/2	10787/3						砂粒をわずかに含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077の「のち」	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
26	302	美形土器	破片	口縁部 ～底部	9785/3	9786/2	7.9787/1						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077 突・2077	焼成良 好 僅きヤ モン	9	613
27	301	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	10784/6	9784/4	2.9786/4						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
28	711	美形土器	破片	口縁部 ～胴部	9785/4	9784/4	10784/2						縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
29	584	美形土器	破片 口：33	口縁部 ～胴部	9785/4	9784/3	10782/2						砂粒を若干含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 口唇・2077	焼成良 好 僅きヤ モン	9	
30	709	美形土器	破片 底：8.4	底面～ 胴部	7.9786/3	9783/2	2.9784/1	底 7.9784/1	底 7.9784/2	底 7.9782/2	底 7.9784/1	底 7.9784/1	縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 底・黒調整	焼成良 好	9	721
31	262	美形土器	破片 底：9.4	底面～ 胴部	9785/4	9785/4	10783/2	底 7.9784/1	底 10784/2	底 10784/2	底 7.9784/1	底 10784/1	砂粒を若干含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 底・77	焼成良 好	9	
32	506	美形土器	破片 底：19	底面	7.9784/3	7.9784/3	7.9783/2	底 2.9784/4	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	砂粒をわずかに含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外・ 外・工具による「のち」 底・77	焼成良 好	9	506と同 一
33	169	美形土器	破片 底：9.9	底面	7.9786/3	7.9786/3	10783/3	底 10785/2	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	砂粒を若干含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外・ 外・工具による「のち」 底・77	焼成良 好	9	
34	607	美形土器	破片 底：19	底面	7.9784/3	10784/2	7.9784/3	底 3	底 7.9784/1	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外・ 外・工具による「のち」 底・77	焼成良 好	9	
35	一般	美形土器	破片 底：9.1	底面～ 胴部	9785/1	7.9785/3	7.9785/3	底 9785/3	底 9785/3	底 9785/3	底 9785/3	底 9785/3	砂粒をわずかに含む 縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・工具による「のち」 外・工具による「のち」 底・工具による「のち」	焼成良 好	9	
36	249	美形土器	破片 底：8.9	底面	7.9784/3	10784/2	10784/2	底 7.9784/1	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	底 10784/2	縄文後半土器含む 弥生前半土器含む	カ・セ・ 白・黒 他	内・外・ 外・工具による「のち」 底・77	焼成良 好	9	

表7 遺物観察表3

図版	表上げNo.	器種	採得数量 (個)	部位	色 外 色 内	色 内 色 外	色 他	胎土粒	遺物別	器種	その他	層位	備考
37	267	象形土器	破片 底: 6.8	底部	5187/2	7. 5183/1	2. 517/1 10194/1	内内 10194/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・付	焼成済 好	9	
38	186	象形土器	破片 底: 9.8	底部	7. 5185/3	7. 5183/1	516/2 7. 5184/1	内内	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・付	焼成済 好	9	
39	271	象形土器	破片 底: 7.4	底部	7. 5186/3	10193/1	7. 5181/3	内内 10193/2	砂粒をわずかに含む 新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・付	焼成済 好	9	
40	262	象形土器	破片 底: 8.5	底部	7. 5184/3	10193/1	10191/2 2. 5185/4	内内 10193/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 底・二具による付の付	焼成済 好	9	
41	552	棒形土器	破片 底: 8.9	底部	7. 5188/4	10193/2	10194/2	底 10194/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 底・二具による付の付	焼成済 好	9	
42	497	棒形土器	破片 底: 10.3	底部	5185/4	7. 5183/3	10193/3	内内 10193/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 底・二具による付の付	焼成済 好	9	
43	436	棒形土器	破片 底: 8.7	底部	10188/2	7. 5184/3	10193/2	底 10194/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 底・黒濁粒	焼成済 好	9	
44	683	棒形土器	破片 底: 4.7	底部	5184/3	5185/4	7. 5184/2 10195/1	底 10194/2	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・黒濁粒	焼成済 好	9	413
45	628	象形土器	破片 口: 15.4	口縁部 ～胴部	2. 5184/4	5184/4	5184/4		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 口唇・付	焼成済 好	9	
46	302	象形土器	破片	口縁部	5185/4	5184/4	5184/4		新砂粒を若干含む 炭砂粒を若干含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 口唇・付	焼成済 好 僅きヤ モン	9	
47	296	象形土器	破片	口縁部	7. 5185/3	5185/4	5185/4		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 口唇・付	焼成済 好 僅きヤ モン	9	
48	638	象形土器	破片	口縁部	7. 5186/3	5186/4	5185/4		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 口唇・付	焼成済 好 僅きヤ モン	9	
49	664	象形土器	破片	口縁部	5184/3	2. 5184/4	10194/3		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 口唇・付	焼成済 好 僅きヤ モン	9	
50	338	象形土器	破片	口縁部	10194/2	5185/3	10194/2		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 口唇・付	焼成済 好	9	
51	437	象形土器	破片	口縁部	5185/6	2. 5185/5	7. 5185/3	10196/3	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 口唇・付	焼成済 好	9	
52	184	象形土器	破片	底部	5186/3	2. 5185/4	10194/2		新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・二具による付の付	焼成済 好	9	
53	682	象形土器	破片	底部	5184/4	5184/4	2. 5184/3	2. 5185/3	砂粒をわずかに含む 新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・付 黒・付 底・二具による付の付	焼成済 好	9	
54	616	象形土器	破片	底部	5185/4	5186/4	5185/4	底	新砂粒を含む 炭砂粒を含む	カ・セ・白・内・二具による付の付 黒・付 底・付	焼成済 好	9	418

表8 遺物観察表4

図版	取上げNo.	器種	図解法量 (cm)	部位	色 外	色 内	色 底	色 物	胎土数	混和剤	特徴	その他	部位	検査
55	485	コップ形土器	縦片 底:4.6	底部へ 側部	5195/4	7.5194/2	7.5193/2	底 2.5194/1	RC 10195/4	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
56	358	壺形土器	縦片	側部	5195/4	2.5195/6	2.5195/6	10195/3		顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好 傾きヤ ヤ	9	
57	496	円形土器	縦片 口:8	口縁部 ～側部	5195/6	5195/6	5197/4			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
58	261	円形土器	縦片	唇部 ～底部	7.5195/4	7.5193/4	7.5193/4	底 7.5194/1	10195/4	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
59	264-2	高坏形土器	縦片 口:29	口縁部	5195/4	5195/4	7.5194/3			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	717
60	297	高坏形土器	縦片	側部	5195/4	5195/4	5195/4			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	361上同
61	518	高坏形土器	縦片	口縁部	5195/4	2.5195/4	5195/4			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好 傾きヤ ヤ	9	629上同
62	449	高坏形土器	縦片	口縁部	10195/2	7.519/3	7.5195/4			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好 傾きヤ ヤ	9	
63	一般	高坏形土器	縦片	口縁部	2.5195/6	2.5195/6	2.5197/6			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好 傾きヤ ヤ	9	
64	482	酒杯形土器	縦片 底:11.1	底部へ 側部	5195/4	7.5193/3	7.5193/3	10194/2	10194/2	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
65	288	高坏形土器	縦片 底:13	底部へ 側部	2.5195/6	5194/4	2.519/1	10194/2	10194/2	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好 傾きヤ ヤ	9	
66	170	高坏形土器	縦片	唇部 ～側部	5197/3	7.5195/4	7.5195/3	10194/2	10194/2	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
67	171	高坏形土器	縦片 底:8.4	唇部 ～側部	7.5195/3	10194/3	10194/2	10194/2	10194/2	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
68	206	高坏形土器	縦片	肩部	7.5195/4	7.5195/4	10195/3	10194/4		顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
69	208	高坏形土器	縦片 底:11.2	底部へ 側部	5194/4	2.5194/4	5195/2	10194/2	10194/2	顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
70	519	高坏形土器	縦片	肩部	7.5195/3	7.5195/3	7.5194/2			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
71	178	酒杯形土器	縦片	肩部	2.5194/4	5191/1	5194/3			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	
72	271	高坏形土器	縦片	肩部	7.5197/3	5198/2	5195/4			顔料を混ぜ含む 白・黒 鉄	カ・セ・内・外 外・外 鉄	胎成良 好	9	

第4章 まとめ

今回の調査では、橋牟礼川遺跡や迫田遺跡で検出されている土器集中廃棄所に類似した状態で多量の成川式土器が出土した。完形品はなくすべてが破片資料であった。器種を見ると、甕が卓越して多い。甕の口縁部形態は、直行するものが多く、次いで若干内湾するタイプのものが混在する。成川式土器の中でも「辻堂原タイプ」と呼ばれる一群に該当するものと思われる。また、高杯の脚を転用した輪の羽も出土した。尾長谷迫遺跡や橋牟礼川遺跡では、同時期の鍛冶炉を有する壁穴住居跡や碗形鉄滓、鉄屑類が検出されており、5世紀～6世紀代には鍛冶技術が入ってきていることが知られている。鍛冶関連遺物の出土は、指宿地域において鍛冶技術が普及していた様相を示唆するものと考えられる。

(文責 渡部)



写真19 調査風景



写真20 地層の状況



写真21 遺物出土状況 1

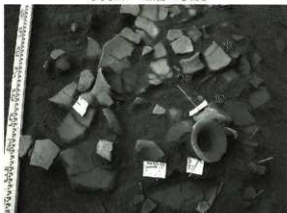


写真22 遺物出土状況 2



写真23 ビット完掘状況



写真24 ビット2断面

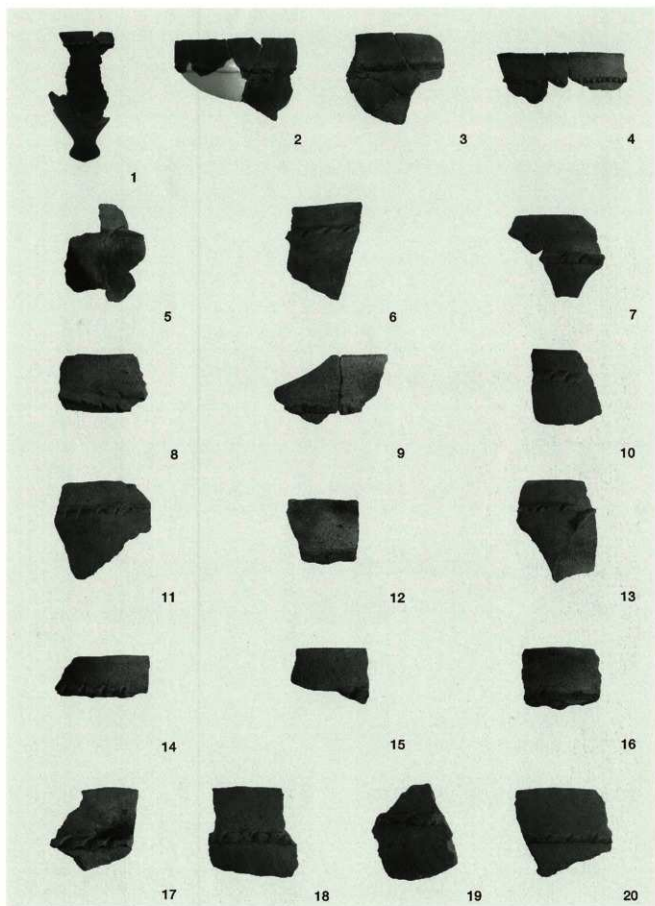


写真25 出土遺物 1

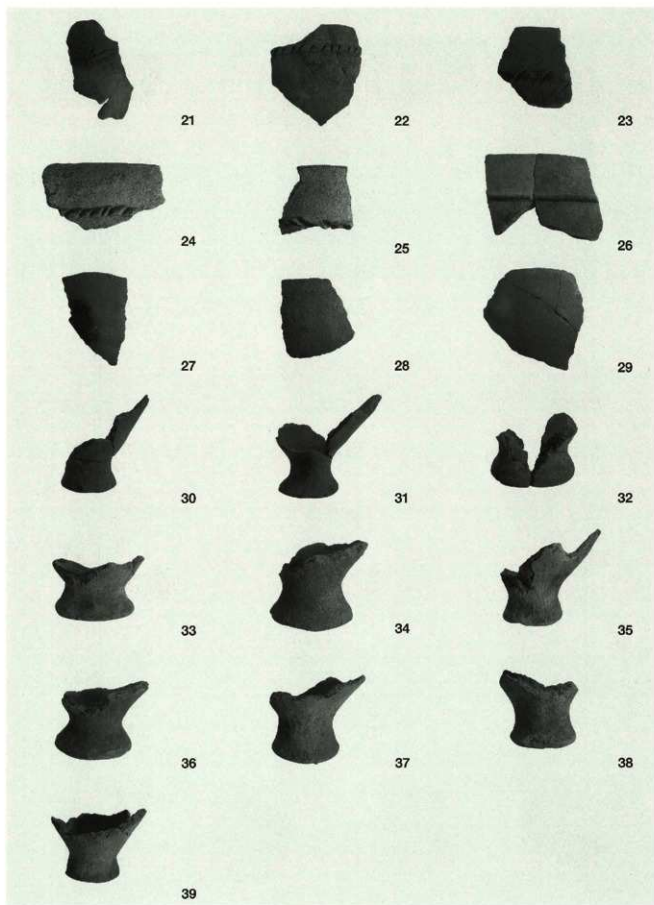


写真26 出土遺物 2

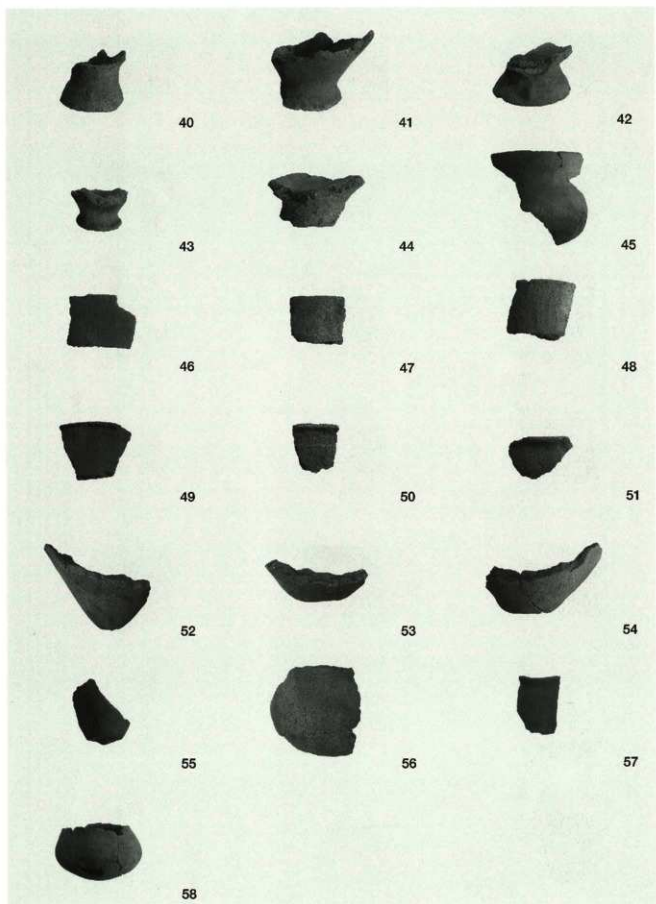


写真27 出土遺物 3



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72
(内面)



72
(外面)



73



74



75



76



77

写真28 出土遺物 4

1. 南迫田遺跡について

南迫田遺跡は、指宿市十町字野村に所在する。遺跡の立地は、池田湖の東側外輪山の山裾、海拔16～25m前後の火山性扇状地である。平成5年度に農道新設事業に伴い実施した確認調査によって、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認された。その後、平成7年度、平成9年度に実施された農道新設事業に伴う発掘調査では、中世から近世にかけての道跡や溝状遺構が検出され、当該期の陶磁器類が出土した他、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物も出土した。

調査地点は、迫田遺跡の南西に隣接するが、調査地点の前をとおり農道の確認調査は、迫田遺跡発見以前に、南迫田遺跡として実施した経緯があるため、ここでは、南迫田遺跡として報告する。

今回は、農道西側の谷地形部分に火山・砂防ダム建設が計画され、工事に先立ち遺物包含層の有無確認を目的に調査を実施した。

■期 間：平成17年11月2日（水）

■面 積：10㎡

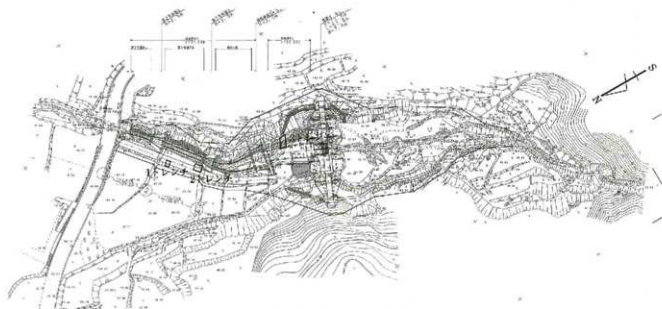
■調査担当：鎌田洋昭

確認調査の結果、1、2トレンチにおいて、第2層、第4層から陶磁器類と土師器片が出土した。また、2トレンチでは紫コラの堆積が確認された。3トレンチでは遺物包含層は認められなかった。

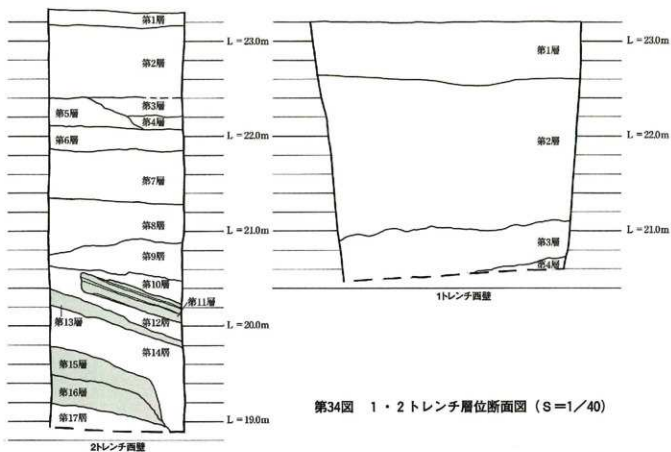
第35図は、第2層から出土した片口を有する土器片である。



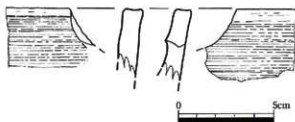
第32図 調査地点位置図



第33図 トレンチ配置図



第34図 1・2トレンチ層位断面図 (S=1/40)



第35図 出土遺物実測図 (S=1/2)



写真29 出土遺物



写真30 1トレンチ地層状況



写真31 2トレンチ地層状況

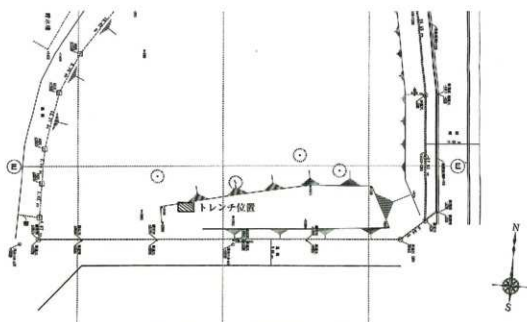
2. 新番所後遺跡について

新番所後遺跡は、指宿市十二町字尻垂ノ上に位置する。西方にある鵜池マールの外壁をなす標高約280mの山から緩やかに下りてきた山裾にあたり、標高は約32mである。北方約0.5Kmには、国指定史跡指宿橋弁礼川遺跡が、南に約1Kmの地点には成川遺跡があるなど周辺にも多くの遺跡が確認されている。

新番所後遺跡は、指宿国立病院の敷地をほぼ包括している。昭和49年に鹿児島県によって行われた指宿養護学校建設に伴い初めて発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土した。その後、平成4年に行われた指宿国立病院職員官舎建設工事に伴う発掘調査では、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物が出土している。縄文時代晩期の遺物には、上加世田式、入佐式、黒川式、刻目突帯文などの数時期の土器をはじめ、扁平打製石斧、磨製石斧、石皿、蔽石等良好な資料が得られている。



第36図 調査地点位置図



第37図 トレンチ配置図 (S=1/800)

今回、指宿国立病院職員の新たな官舎建設工事が計画されたため、掘削される範囲において、最大掘削深度1.7mまでの遺物包含層の有無確認を目的にトレンチを設定して調査を実施した。

■期 間：平成17年11月17日（月）

■面 積：9.8㎡

■調査担当：鎌田洋昭

確認調査の結果、現地表面から2.2mまでの深さで、下記の地層を確認したが、掘削予定深度内には遺物包含層が認められなかった。

以下に層位の状況を記す。

第1層：盛土（他地点からの廃土、池田シラスが混在）

第2層：盛土（池田シラスを含まない）

第3層：褐色土層（旧表土層、無遺物層）

第4層：黒色土層（中世に該当、無遺物層）

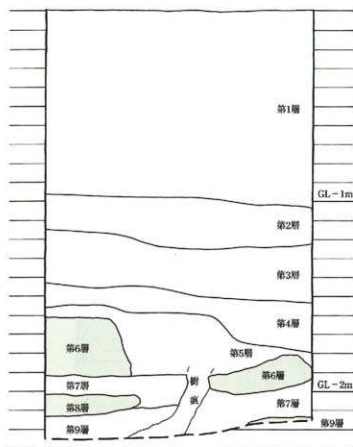
第5層：褐色土層（無遺物層）

第6層：紫コラ（874年の開闢岳火山灰層）

第7層：暗褐色土層（無遺物層）

第8層：青コラ（7世紀第4四半期の開闢岳火山灰層）

第9層：スコリア混在層（無遺物層）



第38図 層位断面図 (S=1/20)

(文責 波部)



写真32 調査区全景

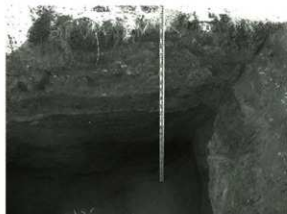


写真33 地層の状況

表9 第93条届出・対応一覧

通称名	所在地	受付日	種別	公共	面積	工事立金	確認調査	発掘調査	慎重工事
1	片野田遺跡	十二町2830-4	16-12-22	個人住宅		248.94			○
2	大淵原遺跡	大淵原後2898	17-1-17	個人住宅		386.09	○		
3	道下遺跡	西方宇中林558-1	17-2-18	倉庫など		571.45			○
4	矢石遺跡	十町字権ヶ山2341-1, 2342-1, 2	17-2-18	個人住宅		485.14	○		
5	南畑ヶ浜遺跡	島の浜4丁目3242-2	17-2-21	個人住宅		308.85	○		
6	大淵原遺跡	西方字市之原6715	17-2-28	個人住宅		677.3	○		
7	片野田遺跡	十二町字諏訪下2665-1, 2661-1	17-3-23	倉庫		503.63	○		
8	矢石遺跡	十町字田穂村ノ下2409-5	17-4-21	物品販売所		175.74	○		
9	小田遺跡	十二町字田原2364-1	17-5-10	個人住宅		170.83			○
10	南畑ヶ浜遺跡	島の浜6丁目3709-3	17-5-23	個人住宅		403	○		
11	山王遺跡	十二町字三平3476-1	17-6-22	個人住宅		387.59	○		
12	高田原遺跡	十二町2102-3, 4, 5, 2103-1, 2, 3, 4他	17-7-4	病院		9600.99			○
13	泊田遺跡	十二町字中園下232-ロ	17-7-6	無用途塔		220			○
14	南畑田遺跡	十町字水玉利2023-3	17-7-7	個人住宅		235.67			○
15	小田遺跡	十二町字宮園2325-1, 2327-1	17-7-8	店舗		488.49	○		
16	南丹波遺跡	島の浜4丁目2903, 2901-4	17-7-27	銭湯		403.29		○	
17	数原遺跡	十二町字数原2255	17-7-28	個人住宅		287.46	○		
18	大淵原遺跡	西方2917-1	17-7-22	個人住宅		203.37	○		
19	道下遺跡	西方字奈良後463-1	17-8-4	個人住宅		286.73			
20	中島ノ下遺跡	東方字宍馬1594-5	17-8-2	個人住宅		250.32	○		
21	南畑田遺跡	十二町字刺神ノ後447-1, 2	17-8-15	共同住宅		999.96		○	
22	南畑田遺跡	大字十町字山ノ神平2902-3他	17-8-18	砂防ダム	○	2000		○	
23	南畑ヶ浜遺跡	十二町3762地	17-8-18	道路	○	3000			○
24	橋幸礼川遺跡	十二町2303-3, 4	17-8-26	個人住宅		402.46	○		
25	田口田遺跡	西方字田口田2094-1, 2, 3, 2095-1	17-8-31	葬祭場		2354.22	○		
26	幸原遺跡	新西方小字鳴ヶ埜	17-9-1	広域農道	○	3200		○	
27	幸原遺跡	新西方小字鳴ヶ埜	17-9-1	広域農道	○	1300			
28	道下遺跡	西方字奈良後459-1, 460-5, 461-8	17-9-9	個人住宅		318.52	○		
29	佐良原遺跡	西方字御伊勢平4481-6	17-9-16	個人住宅		507.21	○		
30	南丹波遺跡	島の浜4丁目5-4	17-9-22	個人住宅		280.67	○		
31	弥衣ヶ湯遺跡	十町字塩入前1312	17-10-6	個人住宅		344.38	○		
32	新瀬所後遺跡	十二町4145	17-10-11	公葬員舎	○	1867.4	○		
33	矢石遺跡	十町字冷蔵津2443-6	17-11-10	個人住宅		231.16			○
34	橋幸礼川遺跡	十二町2293-2	17-11-25	個人住宅		363.8	○		
35	南丹波遺跡	島の浜3丁目3047-2	18-1-12	共同住宅		588	○		
36	南丹波遺跡	十二町字南丹波2924-3	18-1-19	個人住宅		200.33	○		
37	南丹波遺跡	島の浜3丁目2945-1	18-1-20	個人住宅		303.7	○		

平成18年1月末日現在

表10 報告書抄録

ふりがな	しきりょう みのみきこだ しんぼんしょうしる							
書名	平成17年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・南迫田遺跡・新番所後遺跡）							
副書名	-							
巻次	-							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	中摩 浩太郎 渡部 徹也 鎌田 洋昭							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL: 0993-23-5100							
発行年月日	平成18年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
敷領遺跡	指宿市十町小字敷領	46210	2-58			2005.8.10 ～ 2002.3.31	100 m ²	重要範囲確認調査（国庫・県費補助事業）
南迫田遺跡	指宿市十町字野村		2-13			2005.11.2	10 m ²	
新番所後遺跡	指宿市十二町字尻重ノ上		2-28			2005.11.17	9.8 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
敷領遺跡	集落・生産遺跡・火山災害遺跡	奈良～平安	水田跡 ピット	須恵器・土師器等	874年の開聞岳噴火で埋没した水田跡。参考文献：「敷領遺跡」1997、「敷領遺跡Ⅱ 弥次ヶ湯古墳」1999、時遊館COCCOはしむれ企画展示図録「龍摩の「隼人」と律令制度」2002			
南迫田遺跡	集落	弥生～中世	—	瓦質土器片	古墳・奈良～平安、中世の遺物包含層を確認			
新番所後遺跡	包含地	縄文～奈良・平安	—		遺物包含層は未確認			

